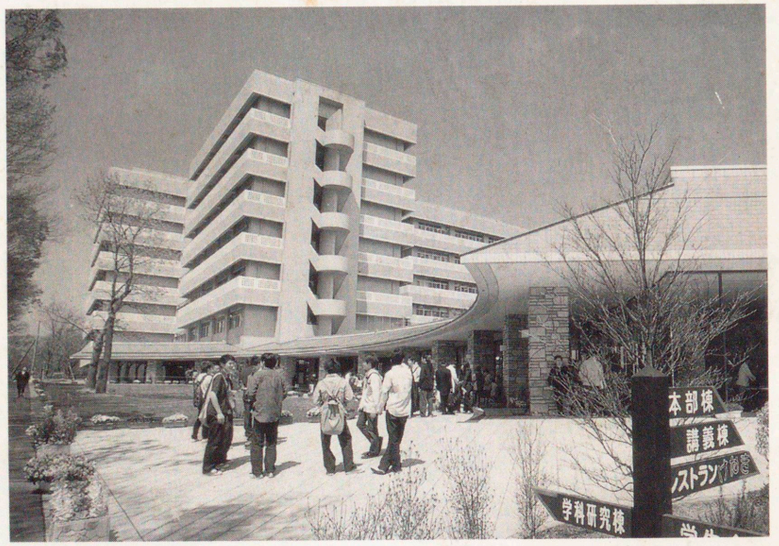
ふじみの



No.39

東京農大畜友会

巻頭言

古川　徳

「はーるよこい、はーやくこい、あーるきはじめたみいちゃんが……」と心の中で歌いながら心待ちにしていた春がやっときました。春は温かさに誘われ心も体もうきうきする季節ですが、悲しい別れや嬉しい出会いの季節でもあります。

四年生の皆さんご卒業おめでとうございます。新たな社会への門出を心からお祝い申し上げます。皆さんにとっては楽しく短い大学生活であったかもしれませんが、この間、物心両面にわたって惜しみない援助を頂いたご両親にとっては待ちにまった卒業式です。どうぞご両親への感謝の気持ちを忘れないで下さい。

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。皆さんはこれからの大学生活に多くの夢を持っておられることと思います。その夢の実現のために一歩一歩前進していただきたいと思います。

春に先立ち、年の暮れになると一年間を振り返って反省し、新年の飛躍に生かそうとします。この二、三年間を振り返ってみますと口蹄疫、牛海綿状脳症、畜産食品中毒、牛肉の産地詐称など畜産に関係する悲しい事件・事故が多かったように感じます。これらの事件・事故は消費者の畜産食品に対する安心感のみならず、畜産業界そのものに対する信頼をも打ち砕くものです。人々があまりにも経済を優先し、他を思いやる心を失ってきており、それが要因の一つとして挙げられるのではないでしょうか。これらの問題解決と畜産領域の発展は、若い皆さんの勉学と努力によって得られる成果にかかっております。各人が与えられた時、場所において今までに得た知識を知恵に変えて問題解決の方向を見出してください。

終わりに当たり本誌に寄稿いただいた多くの方々、編集の労をとられた関係各位に感謝申し上げます。

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　市川方啓

菜の花の香り漂い、桜の芽もほころぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第三十九号を発刊することとなりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載するとともに昨年一年間の事業報告等を記載しています。今年は、厚木キャンパスに移転し3年が経ち、「厚木キャンパス」の土台が形成された様に思います。まだまだ新しく変化しつつありますが、その中で学生一人一人が感じた「夢」や「希望」、また「努力」や「不安」などの文章が載せられています。是非、隅々までご覧いただけたら幸いです。

ふじみの
目　次

巻頭言　古川　徳

ふじみの発刊にあたり　市川　方啓

同窓会だより
同窓会会長あいさつ　伊藤　澄麿

畜産振興会
東京農業大学畜産振興会　便り　渡邉　誠喜

研究室だより
家畜繁殖学研究室
家畜飼養学研究室
家畜学研究室
畜産物利用学研究室
家畜育種学研究室
家畜生理学研究室
家畜衛生学研究室
野生動物学研究室

ふじみの寄稿原稿
ネズミと共に　土屋　公幸
東京農業大学に赴任して
～1年生（教員）のひとりごと～　花田　博文
今再び厚木に赴任して　池田　周平
収穫祭と阿波踊り　小川　博
偽りの（？）ホームページ（HP）の危機　桑山　岳人

集う学友
農大にRADISH（大根）あり　4年　赤間由樹子
文展をほんのちょっとだけふり返って　3年　太田　真琴
イルカにまつわるエトセトラ　2年　伊従　留南
同好会　2年　林　晋平

畜友会だより
平成十四年度畜友会事業報告
平成十三年度畜友会決算報告
特別会計収支報告
平成十四年度畜友会予算
特別会計予算
平成十四年度畜友会役員
第三回厚木キャンパス収穫祭・
第一一一回体育祭事業報告及び結果報告
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第三回厚木キャンパス収穫祭・
第一一一回体育祭各部門委員長より
イェイ！イェイ！　統一本部委員長　3年　市川　方啓
特別企画なあたし★　特別企画委員長　2年　飯田　真希
私の誇り　宣伝隊隊長　3年　富田　裕子
仲間たち　御輿隊長　3年　佐伯　勇一
力戦奮闘　体育祭委員長　3年　酒井　孝徳
やぐら　櫓装飾委員長　2年　飯塚さやか
出会い　研究棟アート委員長　3年　宮崎　美帆

一〇〇％家畜苑　家畜苑委員長　3年　横川　暁士

編集後記　3年　富田　裕子

同窓会だより

同窓会会長あいさつ

畜産学科同窓会
会長　伊藤澄麿

昭和二十四年に設置された畜産学科は今年で五十四年の月日を経ることとなりました。これまでの間、昭和二十八年の第一期卒業生以来、延べ六、六〇三名の同窓生を世に送り出し、それぞれが国内、外を問わず畜産業ならびに関連産業において活躍されています。

本会は、昭和六十三年に畜産学科創立四十周年を迎えた折り、会員相互の親睦を図ると共に畜産学科の発展に寄与することを目的に設立されました。以来、会員の皆様のご協力により先のような事業を着々と展開しております。

一、畜産学科への援助
二、新入会員および卒業祝賀会への援助
三、会員名簿の追補版の発行
四、同窓会報の発行
五、総会および親睦会の開催
六、役員会および常任幹事会の開催

昨年は、厚木キャンパスに入学した同窓諸氏を学舎であり、生活の中心地であった厚木キャンパスから送り出すべく初めて卒業式が行われました。長い歴史の刻まれた学科ではありますが、毎回新入会員にとっては全てが新しい経験であり、祝賀会には世田谷キャンパスとは異なり全員が参加し長い時間教員、友人と談笑され満足されたことと思います。

本誌の発行は平成十四年度の卒業式当日と思います、卒業生諸氏はご卒業おめでとうございます。本日から同窓会会員となられる訳ですから、本学科で学ばれたことに胸を張り、そして共に過ごした仲間、先輩、後輩と生涯連絡を密に取り合いながら各界でご活躍戴きたいと思います。そのケルンとして同窓会を活用下さい。

準会員である新入生を含めた在校生諸氏は、生涯の友、恩師に恵まれるよう本会を活用され、恩恵を受けていただくと共に文武両道の精神で勉学、課外活動に活躍され、悔いのない学生生活を通じて幅広い人格を形成されますことを祈念いたします。

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会　便り

東京農業大学畜産振興会
会長　渡邉誠喜

東京農業大学畜産振興会が発足して、十一年という新たな十年に向けての一歩を踏み出しました。そこで「ふじみの」発行にあたり、本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業にについて紹介させていただきます。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可をえて設立されました。会の運営に遺漏なきよう学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ることとなっております。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨学生としての採用が毎年二～四年次生の各学年から一名ずつ三名、姉妹校への留学生並びに渡米農業実習生に交通費の一部を支給し、優秀卒業論文賞を毎年一名、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生に対して、それぞれ表彰しております。学生による論文発表や学会での口頭発表は年々増加し、会計担当理事も嬉しい悲鳴を上げるほどになり、益々本会の意義が高まってきております。また近年、社会の経済不況により学費納入が困難な学生も増えており、これらの学生に授業料などの一時貸与も行っております。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第二期の学科学生が卒業いたします。しかし移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにおり、厚木キャンパスは学生のみと云う状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリャマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈いたしました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、それぞれ実習・実験の材料として活用され、さらに厚木キャンパス収穫祭の家畜苑にも参加するなど学生に親しまれております。

本会設立の契機は振興会創刊号に紹介されているように平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜ったことによります。その後、逐次拡大してきた事業を遂行するための資産は、

一　東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
二　賛助会員会費
三　一般寄付金
四　その他の収入

によって賄われておりますが、充実した事業の展開のためには更なる原資が必要であります。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念いたし、振興会便りといたします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

私達、家畜繁殖学研究室は、優秀な形質をもつ家畜・家禽をいかに効率よく増やす繁殖方法を最大の目標としている。百目鬼郁夫教授をはじめ、門司恭典助教授、桑山岳人助教授、佐藤光夫講師のご指導の下、大学院生11名、4年生31名、3年生30名の室員1人1人が自覚と誇りを持ち、互いに協力し、それぞれの夢に向かって、日々研究を行っております。

研究内容としては、

・生殖リズムとそれに対するホルモン関与
・繁殖行動に対する内分泌的要因
・精子・卵子または胚の凍結保存
・体外受精卵の受精から卵の発育までの培養
・環境ホルモンの影響についての研究

などの最先端の研究をし、希望に溢れかえっています。

3年生においては、当研究室で飼育管理しているシバヤギ・ミニチュアブタ・鶏とそれぞれの班に分かれ、日常の飼育・管理をするとともに、繁殖学に関する基礎知識や実験方法・その技術を身につけ、個人を高め目標に向かって活動しています。

年間の主な行事は、新入生歓迎会、年2回の納会並びに大掃除、収穫祭（文化展）への参加、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、毎週行われるゼミ等があります。その中でも、収穫祭文化学術展で毎年優秀な成績を修めています。

今後も当研究室では、より一層の飛躍を心に誓い、邁進して行きたいと思っていますのでこれからも宜しくお願い致します。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
石坂　恵美	シバヤギにおける多排卵誘起処置法の検討	百目鬼教員 門司
泉　孝士	安息香酸エストラジオール投与がシバヤギの造精機能に及ぼす影響	門司 百目鬼
稲村　玲士	ミニチュアブタにおける血漿と精漿中性ステロイドホルモン濃度との関係	門司 百目鬼
上山　惟人	ミニチュアブタの妊娠期におけるDES投与が産子の生殖器に及ぼす影響	百目鬼 桑山

片野　恵介　乳用牛の分娩前後における飼料中への強肝剤添加が繁殖性に及ぼす影響　百目鬼　佐藤

加藤　博雅　膣内留置型プロジェステロン製剤（CIDR）と馬絨毛性性腺刺激ホルモン（eCG）を用いたシバヤギの発情同期化　百目鬼　桑山

神戸　浩恵　ニホンウズラにおける右卵管の発達に関する研究　桑山　百目鬼

斉藤　憲之　岐阜地鶏の就巣終了後における換羽状態と血中甲状腺ホルモンおよびエストロジェン濃度との関係　桑山　百目鬼

新保　麗子　栄養補助剤添加による種雄豚の夏季不妊症に関する対策試験　門司　百目鬼

関　克史　シバヤギ精巣細胞の凍結保存法の検討　門司　桑山

多宇　正登　長期休産鶏の産卵再開始の試み　桑山　門司

東内原幹子　雄ニホンウズラにおける反復採血がテストステロン分泌に及ぼす影響　桑山　門司

増田　裕亮　造精機能低下を示すミニチュアブタに対するホルモン療法について　百目鬼　門司

峯野　忍　黒毛和種における夕刻1回給餌による昼間分娩誘起に関する研究　門司　佐藤

守屋　壮　妊馬血清性性腺刺激ホルモンおよび性腺刺激ホルモン放出ホルモン投与による複黄卵作出の試み　桑山　百目鬼

諸星　瑠美　雄岐阜地鶏の緊縛保定後における血漿コルチコステロンおよびテストステロン濃度の変動について　桑山　門司

山本　美和　春機発動前後の雄シバヤギにおける血中性ステロイドホルモン濃度の推移　百目鬼　門司

吉開　有香　無発情シバヤギの卵巣機能回復の試み　百目鬼　門司

高橋　智幸　雌シバヤギにおけるコルチゾールの日内変動について　百目鬼　桑山

高橋　哲也　ブタ精液の凍結保存における精漿の有効性について　門司　百目鬼

田立　俊介　ブタ低ランク卵子の成熟率に培養液が及ぼす影響　門司　百目鬼

只野　亮　セイロン野鶏と岐阜地鶏のF1作出に関する研究　桑山　門司

角田　春海　ガラス化液への段階的浸漬がブタ卵母細胞の凍結後の成熟率に及ぼす影響　門司　百目鬼

二宮　英子　ミニチュアブタにおける発情周期に伴う血中イソフラボン濃度と性ステロイド濃度との関係　桑山　百目鬼

林　洋子　ミニチュアブタの副生殖腺分泌液に及ぼすDESの影響　門司　百目鬼

東　誠　雌シバヤギにおける糞中性ステロイドホルモン濃度の測定法の検討　百目鬼　桑山

小池　彩子　シバヤギにおけるPGF2αの合成阻害剤投与による分娩遅延について　百目鬼　門司

伊藤　秀行　ブタ用受精培地へのペントキシフィリン添加がブタ体外受精の受精率に及ぼす影響　門司　百目鬼

田仲景士郎　ミニチュアブタにおける糞中および唾液中のコルチゾール濃度の測定法の検討　百目鬼　桑山

濱野真美子　ミニチュアブタに投与したDESの乳汁への移行について　門司　百目鬼

一瀬　幸代　異種家禽間の胚培養システムに関する研究　桑山　小川

家畜飼養学研究室

本研究室は、牛・豚・鶏などの家畜・家禽から、乳・肉・卵等の動物性食品を効率よく生産していくために、どのような飼料（飼料学）をどの位（動物栄養学）、どうやって（家畜管理学）与えるかを常に追求しています。さらに飼料の最終形態である糞尿の環境に及ぼす影響についても研究を行っています。これら全てを包含した学問が家畜飼養学です。さらに家畜飼養学の分野は現在、コンパニオンアニマル、実験動物にも応用されてきています。今後は野生動物への応用も進めていく予定です。

研究は、栗原良雄教授、祐森誠司助教授、池田周平助教授の指導のもとに、進められている、その成果は（社）日本畜産学会大会、日本養豚学会大会、日本家畜管理学会大会等に毎年発表されています。研究室の活動は、月2回のゼミ、春の富士畜産農場での専攻実習と新室員歓迎会に始まり、夏の畜産管理実習（学外）、飼料成分分析実験、秋の収穫祭への参加（平成14年度模擬店：カレーうどん、文化学術展：家畜糞尿から出る環境負荷物質の低減について）、畜産関連諸施設の見学を兼ねた研修旅行、卒論発表会、卒業生サヨナラパーティー、年二回の大掃除に納会と盛りだくさんです。各活動を通し、室員の団結を深め、それぞれが、目的意識を持ち有意義な学生生活を送っています。

研究室のモットーとしてときには厳しいこともありますが、家庭的な雰囲気を大切にしています。卒業生の進路は自営（酪農・養豚・養鶏）、畜産関連農場・実験動物関係・飼料関係・食品関連等の民間会社、大学院、教員、公務員等に進んでいます。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
		指導教員
池添　博昭	脱臭資材の量とアンモニア吸着量の関係	池田　祐森
井出由希恵	幼兎における飼料原料の粗タン白質およびエネルギーの消化について	栗原　祐森
小笠原由衣	低タン白質・低エネルギー飼料の給与が肥育豚の成長に及ぼす影響	池田　鈴木
小野寺　拓	光環境（波長）が卵質に及ぼす影響	栗原　祐森
北爪　正文	未利用グラスサイレージの再利用に関する研究	栗原　池田
金城　玲香	成兎における飼料原料の祖タン質および及ぼす影響	栗原　祐森
小池　裕介	ビタミンA欠乏が卵質に及ぼす影響	栗原　池田
高坂　祐一	ラットの盲腸内への抗生物質投与が飼料の消化に及ぼす影響	祐森　池田
小堀　正展	各種脱臭資材のアンモニア吸着効果について	池田　祐森
酒井　良太	幼兎における飼料原料の粗繊維ADF、NDFの消化について	栗原　祐森
関内　慎介	乳用牛におけるコルチゾールの日内変動について	栗原　佐藤
長　将信	光環境（波長）が産卵に及ぼす影響	栗原　祐森
津嘉山　洋	乳牛へのアミノ酸添加が排泄物中の窒素量に及ぼす影響	栗原　佐藤
西川　知佳	低タン白質・低エネルギー飼料の給与が肥育豚の排泄物中の環境負荷物質に	栗原　池田
沼野裕一郎	乳用牛における唾液中コルチゾールの測定	栗原　佐藤
平野　由夏	馬の糞尿比と臭気ガス発生の関係	祐森　栗原
不二山佳代	低タン白質・低エネルギー飼料の給与が肥育豚の消化に及ぼす影響	栗原　池田
真下　秀幸	低タン白質・低エネルギー飼料の給与が肥育豚の肉質に及ぼす影響	池田　鈴木
松本　明子	低タン質・低エネルギー飼料の給与が肥育豚の排泄物由来の臭気ガス発生に及ぼす影響	栗原　池田
守田実稚子	ラットの盲腸摘出が粗タン白質、酸性デタージェント繊維および熱量の消化に及ぼす影響	祐森　池田
八木真友美	食糞の阻止がラットの免疫反応に及ぼす影響	祐森　池田

八並　一平　成兎における飼料原料の粗繊維、ＡＤＦ、ＮＤＦの消化について　栗原　祐森

由良直次郎　ガス分析型呼吸試験装置によるウサギの熱発生量の測定　栗原　祐森

吉村　智史　ラットの盲腸摘出が飼料の消化管通過速度に及ぼす影響　祐森　池田

渡邊　崇志　乳牛へのアミノ酸添加が乳生産に及ぼす影響　栗原　佐藤

和田　圭司　豚糞の水素イオン濃度とアンモニア発生の関係　池田　栗原

岸本　之佳　ビタミンＡ欠乏が産卵に及ぼす影響　栗原　池田

家畜学研究室

本研究室は、大谷忠教授をはじめ、荻原國威講師、西脇充講師の先生三名の御指導のもとに、四年次生二十八名、三年次生二十四名、計五十二名の室員で日々の研究室活動を行っています。

本研究室では、学内外の実習・調査を通し、家畜生産現場での現在の問題点や疑問点について各自が考察し、それらに係わる研究を行っておりますが、家畜・家禽・堆肥・伴侶動物など、研究内容は多岐にわたっております。

現在の主な研究課題は

・魚介類由来極性脂質が家禽に及ぼす影響に関する研究
・ダチョウの孵卵・孵化・育雛・行動等に関する研究
・乳用緬羊の管理に関する研究
・有機物資源の堆肥化と利用に関する研究
・伴侶動物に関する調査・研究

などを行っております。

その他に、年間行事として、新入生歓迎会・研修旅行・納会・月二回の定例会などと各研究班によるゼミがあります。

今年で設立五年目を迎える新しい研究室ですが、今後も各人の自主性を尊重するとともに、研究室全体の協調性も培ってゆけるよう全員で精進してまいります。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
芦口美智恵	輸送におけるブロイラーの生理的変化について	西脇
阿曽　文平	山形県酒田飽海地区における養豚農家の糞尿処理に対する実態調査	西脇　鈴木
天野伸太郎	馬産地の経営安定化について―競走馬の性別による販売価格―	西脇
荒井　信匡	ダチョウの成長に関する研究	西脇
井　佑介	黒毛和種肥育素牛の系統別による増体量および価格の影響について	西脇
伊藤美千代	遠赤外線制御照射水給与が採卵鶏の産卵成績に及ぼす影響	西脇
伊東　元季	Internet―その仕組みの理解と農業との関連―	大谷　久能木
梅田　茂憲	中山間地域における畜産型グリーンツーリズム施設の展開	大谷
太田　和弥	バイオガスプラントから排出される資材の堆肥化と利用に関する研究―スクリュープレス残査及び脱水消化汚泥の急速堆肥化について―	大谷
小川　大和	胎児治療の臨床応用に関する基礎的研究 羊胎児実験センサー装着に対する機能評価と分娩後の羊母体の生理に関する研究	大谷
小国　公造	中山間地域におけるグリーン・ツーリズムのサービスの現状と課題	大谷
小澤伸一郎	ブロイラーヒナを用いた短期・簡易検定法の研究	西脇
後藤　暁	映画に見られる生物の生態・特徴と、現実のそれとの比較および考察	大谷　久能木
五味澤健作	乳用緬羊種の季節外繁殖に関する基礎的研究	大谷

—初生仔の成育について—

篠原　美穂　アシスタンスドッグの現状と今後の課題　西脇

高田　暢子　バイオガスプラントから排出される資材の堆肥化と利用に関する研究　大谷
一次発酵で調製された堆肥施用量が作物生育に及ぼす影響

富岡由香里　ダチョウの色彩感覚に関する研究　西脇

日笠靖十郎　バイオガスプラントから排出される資材の堆肥化と利用に関する研究　大谷
—スィートコーン栽培で見た脱水消化汚泥の肥料効果—

船串美登利　身体障害者のために理想的なふれあい牧場の構築に関する研究　大谷

槇納　理成　ブロイラーヒナに対するヒトデの成長促進物質に関する研究　西脇

松岡　晴代　人とのふれあい度合および方法が子緬羊の馴致におよぼす影響　大谷

松野　和史　バイオガスプラントから排出される資材の堆肥化と利用に関する研究　大谷
—ハツカダイコン栽培でみた脱水消化汚泥の肥料効果—

丸山　愛　ハーブ飼料給与によるブロイラーの生産性に及ぼす影響　西脇

宮崎　悟　育成ダチョウの飼育における緑餌利用に関する研究　西脇

山本　哲也　堆肥調製中に発生する悪臭除去に関する研究　大谷

渡辺　茜　動物とのふれあい機能を有する牧場における子供の環境教育に関する研究　大谷

金田　智香　一般家庭生ゴミの資源化状況および意識に関する調査研究　大谷

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の松岡昭喜教授をはじめ、渡邉乾二嘱託教授、古川徳教授のご指導のもとに大学4年次生26名、3年次生27名の室員で構成されており、それぞれに活発な活動を行っております。

具体的には、乳、肉、卵中に含まれる各成分の化学的、物理的特質ならびに栄養、生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追究し、食品成分の機能性や保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発等に取り組んでおります。

年間の主な活動としては、週1回の食品に関するゼミナール、新入生歓迎会、乳酸飲料、ソーセージ製造実習、ハム、スモークチキンの収穫祭での販売、研修旅行、卒業論文発表会等があります。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
赤石　直樹	培養条件が乳酸菌の粘質物生産に及ぼす影響	古川
阿部　良美	卵白・全卵の殺菌・ゲル形成加熱条件の設定	渡邊
飯野　亮一	エゾシカの肉質についての研究	松岡
臼木　克弘	ドライソーセージの常在有害細菌に対する燻液の静菌効果	松岡
大川　亮	乳酸菌の凍結傷害に及ぼす多糖類の効果	古川
金井　弘喜	酒粕漬け生ハム製造における熟成期間が脂質組成に及ぼす影響	松岡
栗栖　智子	卵白の熱安定性に関する研究	渡邊
香西　文	豆乳を用いたカマンベールチーズ製造の基礎研究	古川
坂井　清香	ドイツ産ドライソーセージから分離した乳酸菌の同定と発酵食肉製品への利用	松岡
相庭　夏樹	乳酸菌及び酵母における降圧成分の検索	古川
青沼　雅子	チーズ熟成に及ぼすハーブ添加の影響	古川

指導教員

坂口　真紀　ヨーグルトの抗酸化能について　古川

櫻井　純一　乳酸菌に対するリゾチームの抗菌作用に関する研究　渡邊

佐藤　智哉　市販馬サシ肉の脂肪酸組成とヘム鉄含量　松岡

柴田　雄次　粘質物生産性乳酸菌のSuperoxide dismutase活性について　古川

正者　沙織　粉末茶葉添加フレッシュソーセージの品質保持に関する研究　松岡

杉原　剛　塩漬卵保存期間の延長に関する研究　古川
渡邊

武井　亮　ケフィールがピロリ菌の生存に及ぼす影響　古川

中山　郷　植物性乳酸菌の摂取が腸管細胞のDNA損傷に及ぼす影響　古川

布川　毅之　フェタチーズ熟成中のタンパク質の変化に関する研究　古川

宮國　科子　腸管細胞のDNA損傷に及ぼすヨーグルトの抑制効果　古川

森　洋平　ラット肝臓アルコール及びアルデヒドデヒドロゲナーゼ活性に及ぼすチーズ摂取の影響　古川

山近　志朗　豆乳ヨーグルトにおける豆臭低減化の試み　古川

小林　優　病原性大腸菌（E.coli）に対する乳酸菌の抗菌性に関する研究　渡邊

樋熊　麻衣　アイラグから分離した乳酸菌の発酵食肉製品への利用　松岡

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、血清学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、天野卓教授をはじめ、花田博文教授、野村講師の指導の下、大学院生9名、4年生28名、3年生28名によって構成され、室員各自の自覚と互いの協力よりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては電気泳動による血液蛋白型の研究・在来家畜の遺伝学研究・組織適合性抗原遺伝子のDNA解析などが行われています。

研究室での日常の活動は実験動物の管理、毎週行われているセミナー、定例室員会、卒業論文などの研究、実験における問題点を解決するため討論などです。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生による、学会発表や学生による他大学や他の研究機関での研究を行っています。

研究室における主な年間行事は、新室員歓迎会、定期総会、収穫際への参加、研修旅行、特別講演会、卒論発表会などがあります。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
石井　剛	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	花田 野村
石川　円	ヤギの毛色支配遺伝子に関する基礎的研究	花田 野村
伊藤芙季子	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	天野 野村
岡　孝夫	野鶏と家鶏の系統遺伝学的研究	天野 花田
木村　靖子	ヤギのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	花田 野村
小島　洋美	Y染色体遺伝子情報によるヤギの系統遺伝学的研究	花田 野村
兒玉　直也	血液蛋白型支配遺伝子によるスイギュウの系統遺伝学的研究	天野 野村

佐々木智子　マイクロサテライトマーカーによる日本産ヤギの遺伝的多様性に関する研究　天野　花田

佐藤　明代　Y染色体遺伝子情報によるウシの系統遺伝学的研究　天野　野村

佐藤　一仁　家畜体内におけるヒト肝細胞の増殖に関する基礎的検討　特に免疫不全マウス体内における移植異種肝細胞の生着・増殖条件の検討　天野　花田

佐藤　貴子　Y染色体遺伝子情報によるスイギュウの系統遺伝学的研究　花田　野村

三本松良子　MHCタイプおよびマイクロサテライトマーカーによるヤギの親子判定に関する研究　天野　野村

清宮　紀子　マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究　天野　野村

竹本　幸平　Y染色体遺伝子情報によるウシの系統遺伝学的研究　天野　野村

立川　悠々　ミトコンドリアDNA cytochrome b 情報によるウシの系統遺伝学的研究　天野　野村

谷村　要　ミトコンドリアDNA D-loop 情報によるスイギュウの系統遺伝学的研究　花田　野村

津川　淳　Y染色体遺伝子情報によるヤクとウシとの比較　花田　野村

中尾　亜耶　ヤギのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析　花田　野村

濱本　麻衣　マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究　花田　野村

日高　吉輝　ミトコンドリアDNA情報によるスイギュウの系統遺伝学的研究　天野　野村

平光真公仁　Y染色体遺伝子情報によるヤクとウシとの比較　天野　野村

平山　恵太　ヤクのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析　花田　野村

美保　俊輔　血液蛋白型支配遺伝子によるスイギュウの系統遺伝学的研究　天野　野村

梁瀬　光昭　ミトコンドリアDNA情報によるヤギの系統遺伝学的研究　花田　野村

山口　愉隆　血液蛋白型支配遺伝子によるウシの系統遺伝学的研究　天野　野村

吉田　博幸　ヤクのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析　天野　野村

石山佳奈子　ウシの毛色支配遺伝子に関する基礎的研究　花田　野村

富山　雅光　マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究　天野　野村

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤恵教授をはじめ、吉田豊講師、原ひろみ講師の御指導のもと、大学院生5名、研究生2名、学部4年次生32名、学部3年次生28名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理的機構の遺伝的支配に関する研究をしており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリ・ホロホロチョウに関する研究、③ウシに関する研究、④イルカ・アライグマ等その他の動物に関する研究に大きく分けられます。

①においては、コンディションによる血液性状の変動、アルギナーゼや赤血球膜タンパク質の遺伝子に関する研究をしています。②においては、各動物の組織適合性複合体（MHC）に関する分子遺伝学的・免疫学的解析、各動物のHSP70遺伝子の解析、ニホンウズラとニワトリの属間雑種に関する研究などをしています。③においては、ウシのビタミンA代謝に関連する諸々の現象に関する研究などをしています。④においては、イルカの血縁関係に関する研究、アライグマの地域的多型解析などが精力的に行われています。

本研究室における日頃の活動を紹介すると3年次には生理学に関する基礎的な知識や実験の技術を身につけるために講義・ゼミ・実験実習を行っていると共に、実験

動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文研究の補助として協力しています。4年次には、前述した研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方との論議により決定し、卒業論文研究を行っております。院生は、自分の学位論文のテーマに則り、日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。

年間の主な行事として、新入室員歓迎会、収穫祭文化学術展・模擬店、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、週1回のゼミナール等があります。

なお、平成14年度の題目は次のとおりです。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
		指導教員
阿部　伸悦	T細胞非依存性抗原により誘導される腹腔内細胞群の経時的変動	半澤 原
新田　真吾	母子牛の分娩前後と子牛の分娩後における血中レチノール量とレチノール結合タンパク質量の変動について	半澤 吉田
石崎絵里子	乗用馬のコンディションによる血液性状の変動	半澤 原
伊藤　歌苗	ニホンウズラにおける血清IgG値の遺伝子様式の解析	半澤 原
伊藤　裕昭	ウマ赤血球系幹細胞における数種の遺伝子の発現解析	半澤 原
岩崎　勉	ミトコンドリアDNAにおけるホロホロチョウの個体変異ならびに多型解析	半澤 吉田
岩本　繁久	ニホンウズラとニワトリにおける属間雑種の作出に関する研究	半澤 原
上田　理恵	ウマp16遺伝子の発現解析	半澤 原
遠藤　大輔	ニホンウズラのTLR2の遺伝子的解析	半澤 原
大坂谷香介	ニホンウズラとニワトリにおける属間雑種のHSP70の解析	半澤 吉田
大濱　英悟	ウマ赤血球K-CL共輸送体遺伝子(KCC1)に関する基礎的研究	半澤 原
大林　通子	ニホンウズラの胸腺細胞およびファブリキウス嚢細胞に対するモノクローナル抗体の作製	半澤 原
小山　順子	ニホンウズラとニワトリの属間雑種におけるMHCクラスI領域の解析	半澤 吉田
笠井建太郎	ウマアミノ酸輸送体遺伝子(SLC7A10)の解析	半澤 吉田
日下部和総	ニホンウズラとニワトリにおける属間雑種の性判別ならびにミトコンドリアDNAに関する研究	半澤 吉田
栗山　佳子	ホロホロチョウの熱ショックタンパク質(HSP70)遺伝子に関するシークエンス解析	半澤 吉田
小泉さゆり	ウシ卵管上皮細胞における不死化細胞株の確立	半澤 吉田
甲田　俊宏	サザンハイブリダイゼーションによるホロホロチョウMHCクラスIおよびHSP70（熱ショックタンパク質）の遺伝子解析	半澤 吉田
下川　賢蔵	ウマアルギナーゼ遺伝子に関する基礎的研究	半澤 原
須藤　稔太	ニホンウズラにおけるT細胞非依存性抗原に対する抗体産生能の系統間差異の解析	半澤 原
徳藏　智	ニホンウズラのMHC クラスIE遺伝子座（Coja-E）の多型解析	半澤 吉田
中村裕美子	ハンドウイルカの血縁関係の解明	半澤 原
橋本　雅子	神奈川県におけるアライグマの地域的多型の解明	半澤 原
久永　勇	抗ウシアポリポタンパク質免疫家兎血清の作出に関する研究	半澤 吉田
横井　文子	ニホンウズラMHCクラスIB1遺伝子座（Coja-B1）の多型解析	半澤 吉田
横澤　香倫	ニホンウズラの熱ショックタンパク質(HSP70)遺伝子の解析	半澤 原

吉田　洋　ウシ甲状腺特異的蛋白質の解析　半澤
吉田

吉原　貴之　ニホンウズラの腸内細菌叢内の菌の同定　半澤
原

古屋奈津子　Retinol Binding Protein from Bos Taurus site 4（合成ペプチド）を用いた牛の血中RBP並びに肝臓組織内RBPの免疫学的検討　半澤
吉田

松原　有美　真菌Aspergillusと好中球の攻防に関する分子基盤の解明　半澤
原

酒井祐里子　飢餓ストレスによるラットの脳内セロトニン分泌量の変化について　半澤
吉田

柿崎　裕樹　分娩前後における母牛の血中・乳中レチノール量とβ-カロテン量並びに仔牛の血球レチノール量とβ-カロテン量の変動に関する研究　半澤
吉田

家畜衛生学研究室

我が家畜衛生学研究室は、室長の近江助教授をはじめ、渡邊助教授、鹿江嘱託教授のご指導のもと、大学院五名、四年生二十六名、三年生二十八名、で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、実験動物班、牛班、豚班、鶏班の四班に分かれ、各家畜・家禽等の疾病に対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。

家畜衛生とは「家畜・家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的とする」が元来の家畜衛生でありましたが、最近では、「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物（ペット）の衛生管理法など家畜家禽以外の各種動物も対象となってきています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭では、模擬店で「しし汁」を出店し、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会等があり、室員の団結を深め、各々が、目標意識を持って有意義な研究および、研究室活動を行ってます。

なお、平成十四年の卒業論文の題目は次のとおりです。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
赤尾　智恵	ヌマガメの飼育水より分離した大腸菌群について	渡邊
赤間由樹子	伴侶動物（犬）の歯周疾患に対する東洋医学の応用・特に薬用植物の治療効果について	近江 渡邊
池谷　篤	豚回虫人工感染豚における駆除法の検討	近江 高崎
糸井　史陽	東京都内飼育管理下におけるレムールの内部寄生虫卵保有状況	近江 渡邊
岩本　美保	厚木キャンパスで検出される罹患動物の臨床細菌学的検査	鹿江 近江
内倉　直彦	犬鉤虫卵の培養法について	近江 渡邊
扇原奈穂子	厚木キャンパス内浮浪猫の生活状況について	近江
大野　幸恵	ダチョウにおけるニューカッスル病ワクチネーションプログラムの検討	渡邊 西脇
大羽　真弓	伴侶動物（犬）のグルーミングに対する意識調査について	近江 西脇
片平　未麻	動物飼育施設管理下リャマの内部寄生虫卵保有状況	近江 渡邊
柴田　彩子	富士畜産農場飼育採卵鶏群のサルモネラ予察調査	渡邊 西脇
清水　裕子	豚胎盤由来放線菌の遺伝学的研究	渡邊
須田　能敬	伴侶動物（犬）の体表に認めた腫瘤の病理組織学的考察	近江 高崎
竹沢　加奈	健康異常（食糞）を認めた犬の診断法の検討	近江 湊邊
田村　一誠	水槽飼育カメ付着生物の検索	渡邊
丹下　亜美	鶏コクシジウムに対するホロホロチョ	渡邊

ウの感受性について

丹所　孝之　山羊の体表に認めた衛生害虫の形態的観察　近注　荻原

塚田　恵太　Propionibacterium属菌の遺伝学的研究　渡邊

鶴田　洋平　我が国の獣医臨床における東洋医学の役割について　近江　渡邊

中村　香織　富士畜産農場飼育豚由来直腸内大腸菌群の薬剤感受性について　渡邊　鈴木

古谷　剛士　古俗畜産管理下の雄豚における精液検査結果について　近江　鈴木

松嶋　紗由　健康異常（肥満）を認めた犬に対する東洋医学の応用　近江　渡邊

松村　光庸　山羊の体表に認めた衛生害虫の駆除法について　近江　荻原

井澤　彩子　豚房内紬菌相に及ぼす清掃法の影響　渡邊　鈴木

小林真里子　豚回虫人工感染ラットの病理組織学的観察　近江　高崎

山崎　佳世　東京農大家畜診療所由来ネコノミの細菌学的検査成績　鹿江　近江

渡邊　深里　伴侶動物（犬）における人獣感染症の文献的考察　近江　渡邊

野生動物学研究室

野生動物学研究室は土屋公幸教授、安藤元一助教授、小川博助教授の指導のもと研究生3名、4年生28名、3年生29名で構成されており、室員がそれぞれの目的をもって研究活動を行っています。

本研究室では野生動物の分類や分布、行動、生態学的な研究を目的としてフィールド調査（厚木キャンパス内や富士農場、箱根、御岳山、韓国などでのサンプル採取や行動観察等）を行っています。さらに、野生小型哺乳類を飼育しそれらの遺伝的な特性の調査や採食行動、形態比較、繁殖習性、成長に関することなど野外では調査が不可能なことについての研究も行っています。

また、近年日本の野生動物の生態系に重大な影響を及ぼしている移入種の問題やその対策、野生動物環境教育の普及啓発活動に関する事など、希少動物種の保全・増殖など人と野生動物の共存を目指し、日々幅広い分野での研究活動を行っています。

研究対象の野生動物には、ネズミ類やモグラ類などの小型哺乳類、ムササビ、テン、カワウソ、タヌキなどの中型哺乳類、シカなどの大型哺乳類の他、ホロホロチョウ、カラスなどの鳥類があります。

研究室内で飼育している動物としては現在のところ世界各地の野生ネズミ類約40種600個体、モグラ類4種、コモンマーモセット、ハシブトガラスなどがいます。

平成十四年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
池田　有貴	厚木キャンパスにおける哺乳類相	土屋　安藤
盆子原恵一	鳥類精子の凍結保存に関する研究	小川
稲田　洋介	東京都青梅市御岳山周辺と静岡県富士宮市富士畜産農場周辺におけるホンドテンの食性比較と糞の分布について	土屋
岩崎　雄輔	ムササビ巣箱と天然樹洞における温湿度環境の比較	安藤
内山　美穂	ロボロフスキーハムスターにおける繁殖習性と成長に関する研究	土屋
小倉　光波	コンパニオン・アニマルと人との関係について	土屋　安藤
小野　大希	多変量解析に基づく下顎骨の形状によるウマ類各種の同定	土屋

金塚　知佳　スナネズミにおける繁殖習性と成長に関する研究　土屋
菅野　悦寛　ハシブトガラスにおける採食行動に関する研究　安藤
草刈　紫乃　野生ハツカネズミにおける血清蛋白質トランフェリンの多型解析　小川　土屋
上月　陽子　鳥骨鶏PGCと宿主白色レグホン胚の性を一致させたPGCキメラ作出について　小川
斎藤　圭史　富士・箱根地域における日本産モグラ類の地理的分布境界　土屋
佐野　円香　野生動物に関わる職業への就業機会の調査　安藤
鈴木　康司　飼育環境がホロホロチョウ雄の血漿コルチコステロン濃度に及ぼす影響　小川
関野　智子　ジャンガリアンハムスターの繁殖習性と成長に関する研究　土屋
鎮西　正太　富士・箱根地域における日本産モグラ類2種の地理的分布境界と土壌硬度との相関　土屋
中島　望　野生ハツカネズミの生化学的標識遺伝子の多型調査　土屋
中野　智紘　御岳山におけるムササビの食性の季節変化と餌植物の栄養成分について　安藤
中間　義之　ユーラシアカワウソの糞分解における形状変化　安藤
長沢　麻子　ノウサギの糞分解過程における環境要因の影響について　安藤
鍋倉　明子　ツキノワグマ・ニホンザル・ホンドタヌキ・ホンドキツネの糞分解過程における形状変化について　安藤
蓁　正充　韓国、慶尚南道海岸地域におけるユーラシアカワウソの分布状況　安藤
畑中　岳彦　韓国におけるカワウソの保全状況…住民の意識　安藤
早川慎一郎　都市部における外来種ミシシッピアカミミガメの生態及び侵入状況　小川
正木　美舟　ニホンジカの生息密度推定のためのライトセンサス法・区画法・糞粒法の比較　安藤
三元　昌美　飼育下のワオレムールにおける子の週齢に伴う親の行動の変化と子の発達について　小川　土屋
安田　和代　ホロホロチョウにおける緊縛保定後の血漿コルチコステロン濃度の変化　小川
山本　美和　鎌倉周辺において捕獲された移入アライグマの繁殖状況　安藤　小川

ふじみの寄稿原稿

ネズミと共に

野生動物学研究室教授
土屋公幸

今から34年前の春、農大を卒業し半年後に研究室を辞めてから非常勤職員として国立科学博物館の動物研究部でネズミ類の標本を作り分類学の勉強をしていた。ある日、国立遺伝学研究所細胞遺伝部に呼ばれてクマネズミを飼育することになった。その頃の遺伝研には木原均、木村資生、駒井卓先生といった高名な遺伝学者がおられた。お姿を拝見するだけで感激してしまい直接お話をうかがったのは数えるほどしかなかったが、その時の興奮は今でも覚えている。

その頃はクマネズミを飼育し、それらの染色体核型を分析するのに忙しくて、1日がそれだけであっと言う間に過ぎていった。朝8時に起きて朝食を終え、8時半からネズミの飼育室内を清掃し、給餌やケージ交換が終わるともう昼食時間だ。ネズミを12匹金網トラップに入れて研究室に持って行く。ネズミたちの腹腔にコルヒチンを注射してから昼食、1時間後に麻酔して採血し、大腿骨を切り出し骨髄細胞を洗い出して染色体標本を作り終わると、もう夕食である。入浴後12匹分のプレパラートを観察し、顕微鏡写真を撮り終わる頃には既に真夜中であった。ゼミに当たった週は、論文読みで徹夜続きになる。当時は構内にあるネズミ飼育舎の片隅に簡易ベットを置いただけの部屋ともいえないところが下宿先であった。仕事か寝るかのどちらかと言うような生活を続け、隔週に東京の自宅に洗濯物を持って帰る時だけが息抜きのひとときという毎日だった。

仕事に慣れた頃、もう秋になっていたが、東南アジアからオセアニアへの2カ月間の海外学術調査隊に参加した。私にとっては始めての海外旅行であった。夏の間は金網トラップを相手国に送り出すのが大変だった。炎天下で荷造りをしたものの、船便が地元発送では間に合わなくなり、神戸港まで新幹線で運んでいったりもした。隊長以下4名全員が始めての学術旅行に要領が判らず、出入国の度に大量の携行器材の持ち込みなどでトラブルが起こった。さらに、捕獲したネズミの一部は生かしたまま日本に発送しようとしていたので、その手続きも大変だった。台湾を皮切りに、香港・タイ・マレーシア・インドネシア（スマトラ・セレベス・ボルネオ）・フィリピン（ルソン・ミンダナオ）・オーストラリア・ニュージーランド・ニューギニアの9カ国と沖縄を巡る2カ月間の調査旅行だった。この時、アジア各地のクマネズミの染色体数が2n＝42であるのに、オーストラリアのそれは2n＝38であることが明らかにされた。現在、前者は *Rattus tanezumi*、後者は *Rattus rattus* という学名で呼ばれるようになった。*tanezumi* はシーボルトが日本から持ち帰ったクマネズミに付けられた学名であり、*rattus* はリンネによって付けられた学名である。その後、我々はスリランカで染色体数が2n＝40というクマネズミを発見した。

それから現在までに30カ国余のネズミ類を調査してきたが、出発前の準備や現地での採集調査、生きたネズミの発送、帰国後の取りまとめなど総てのことは、青春時代とも言える時に参加したこの初めての海外学術調査旅行での体験が基になっている。

私の染色体の研究はしだいに分子遺伝学的な研究も加わって、研究対象もクマネズミからアカネズミやハツカネズミ、モグラなどに移っていった。

一昨年、私が農大を卒業するまで所属していた農学部一般教育の動物研究室から、野生動物学研究室を作られた吉行瑞子教授から教授公募のお話があった。書類を作成して応じた結果、幸いにも二代目を引き継ぐことになった。野生動物学研究室では私が持ってきた30余種の野生ネズミ類を飼育しているが、所属学生の卒業論文研究では、それらの中から幾つかの種類で繁殖習性の研究や、野生ハツカネズミ類の遺伝子解析の研究が行われ、新しい知見が次々と明らかにされつつある。今は後輩の若者たちに囲まれて青春時代に戻ったような、共に学ぶ楽しさを味わっている。

東京農業大学に赴任して

—1年生（教員）のひとりごと—

家畜育種学研究室教授
花田博文

今年の4月に東京農業大学に赴任してまいりました。30年程前に当時千葉市にありました農林省畜産試験場に入り、その後、つくば市、宮崎県、岩手県、再びつくば市と根なし草のごとくあちこち渡り歩いてきました。

先日、「ふじみの」の編集担当者からの原稿依頼をつい承諾してしまいましたが、農大に来てやっと半年。何を書いたら良いものか、今になって頭を悩ませています。久し振りのキャンパスライフ。新米教員が日頃感じていることを自己紹介と併せて記させて頂きます。

私の大学生活は宮崎での4年間。2年時には大学から10キロほど離れた付属牧場での寮生活が義務付けられており、夕方は搾乳、夏休みは早朝から畜産実習と言う日々でした。当時は何故、畜産学科に入学したのかと言う思いも持っていましたが、今ではすべてが懐かしく楽しい思い出となっています。この時、家畜に慣れ親しんだことが、その後の私の職業選択のきっかけになったように思います。昨今の農業を取り巻く環境は当時とは大きく変わってきています。ただ、時代は移っても、大学生には有り余る自由な時間が与えられています。

本学は、110年余の伝統があり、実学主義を建学精神として様々な取り組みがなされているように思います。学生の皆さん、是非、授業や実験実習、富士農場の畜産実習では、それぞれが目的意識を持って積極的に取り組んで下さい。1学年200人余と学生数が多いと、往々にして物事すべてを他人事にしてしまうきらいがあります。大学生活における目標は多様であって当然です。目標達成のためにそれぞれが主体性をもって行動していくことにより初めて、学生数の多さを活かし、それを優秀な人材の宝庫と呼べるものにかえていけるのではないかと思います。

私は、これまで家畜、特に牛の染色体異常に関する研究に従事してきました。大学卒業後はその殆どを研究室で過ごしてきましたが、一時期、県の畜産試験場で豚の育種試験に関わってきたこともあり、畜産農家の後継者の活躍は大いに気になるところです。近年、畜産農家戸数は激減してきています。後継者の皆さん、是非、我が国の畜産の優秀な担い手になれるように頑張って下さい。そのためにはいろんな仲間との触れあいが大切です。肉牛経営を目指す者は養豚農家の後継者との情報交換も必要です。また、3～4年生になっても所属研究室以外の仲間、先生方との交流を持ち続けることが重要と思います。学生の間は少しだけ遊び心を持って活動してみては

如何ですか。

私の学生時代の夢は農業高校の先生になることでした（真面目さと出席日数が足りず、教職の資格さえも頂けませんでしたが）。学生の皆さんと共に語り、一緒に運動し汗することは嫌いではありません。何、私の顔がわからない。白衣、そして長靴にかわいい豚さんのマークが今なお残っています。1～2年生の皆さん、富士の実習等で見かけたら声をかけて下さい。

農大に赴任してきて、教員の最も大切な役割とは何か。時に自問することがあります。過日、農大の教育後援会の会報を手にしていたところ、先に退職された生物生産技術学科の三浦先生の言葉が私にはとても印象的でした。「学生は一人一人が潜在的に伸びる力、向上心を持っている。教員は、その伸びる力を刺激し助けるに過ぎない。教え育てるのではなく助け育てること、助育者でしかないのです。」と述べられていました。元の職場で若い研究員の方と一緒に仕事をするなかで、私も同様の思いを抱いていました。

私自身、今年でもう55歳。体力はもちろんのこと、集中力や理解力、探求心さえも下降の一途をたどっています。これからは学生の心を大いにくすぐり、刺激できればと思っている次第です。いや、まだ55歳。いつまでも熱い心を持ち続けたい。こうも思っています。

学生の皆さん。せっかくの大学生活です。研究室活動、課外活動、何事にも積極的に取り組み、悔いのない学生生活を。

東京農業大学農学部畜産学科、一年生教員（原産地は福岡、育成地は宮崎、選抜形質・趣味は放牧、いわゆるスポーツ）の独り言でした。

最後になりましたが、110余年の長い間に諸先輩が築かれてきました伝統を大切にしながら、畜友会の皆様と一緒に畜産学科のさらなる発展に微力ではありますが、力を尽くしていければと考えています。

今再び厚木に赴任して

家畜飼養学研究室助教授
池田周平

自宅の窓から頭から三分の一に雪をかぶった富士山を眺めながら、もう何年になるか、箱根道での農大生の勇姿を見なくなって・・・・。私が本学農学部畜産学科の学生時代には、現在は厚木キャンパスから車で約四十分のところで酪農を営んでいる服部　誠氏が第五十回東京箱根間大学駅伝大会の花の二区での一二人抜きに感動しながら応援していたなと思い出しながら、今年、関東学生陸上連盟の選抜メンバーに選ばれ、七区の小田原と平塚間を走る山内君を明日はテレビで応援しようと考えながら、各大学の一区の選手が大手町前を走り出したのを観戦しながら書き始めました。卒業後本学に勤務してから現在まで最も長い間お世話になった本学農学部富士畜産農場について「ふじみの」の誌面をお借りして、少し振り返ってみたいと思います。富士畜産農場は、戦前の昭和一六年に海抜八三十メートルの冷涼地であるため、専門部農村経済学科の学生の寒冷地農作業を体験させるために求めた本学邦内唯一の寒冷地農場として始まり、戦後混乱期の五～六年は実習としての利用はされなかったが、昭和二六年頃からは富士農場は風光明媚で自然豊かな地ということから、大学内の各種クラブ、同好会、地元小中学校の強化合宿、林間学校として利用されるようになった。農学部長である天野卓先生も静岡大学付属小学校高学年次に林間学校で、富士農場に宿泊した経験を持っているそうです。畜産学科の実習場としては、昭和三八年七月から平成元年までは、現在、厚木市の防災の丘公園として市民に親しまれている旧厚木農場の畜産施設・牧草地において行われていました。現在在籍する学生諸氏や卒業生諸氏には想像が出来ないでしょうが、今は、家禽類が飼育されている砲台山（豊醍山）の周囲に乳牛舎、豚舎、鶏舎、牧草地がありました。わずかに以前の風景を思い起こさせるのは、厚木キャンパスの研究棟前を通り、柿の木を左に見ながら砂利道を公園に入るとトイレがありますが、すぐ側に大きな「えのき」があります。昔の乳牛の運動場に植樹した畜産部のシンボルとして親しまれていた樹木です。厚木農場での実習と平行して、昭和四十年過ぎから、富士農場の草地圃場整備に畜産学科の諸先輩が参加しました。現、本学名誉教授伊藤澄麿先生、栗原良雄教授の指導のもとでの草地造成実習（実は石拾い）のおかげで現在の生産性の高い圃場となったわけです。多くの先輩が拾われた石材店ができるほどの大量の石は、毛無山寮や富士山寮の基礎となっています。生産性の高い草地の確保とともに、牛の使用頭数が増えたため、貯蔵牧草調製（サイレージ調製）

が必要になり、私が所属する飼養学研究室や短期大学部の畜産学研究室、農場技術練習生が爽快な汗をながしての実習となったのです。私や祐森先生の頃は、牧草を手刈りし巻きトレーラーに積みサイロにおろし足で踏み固めるという汗、汗、汗と筋肉痛（当時はとても辛いと感じていた）の実習でした。このような富士農場での牧草調製実習は昭和六三年まで続いていました。昭和五九年から平成二年に厚木農場から豚、鶏部門、栃木県黒磯の那須牧場からの乳牛関係の富士畜産農場への整備統合までの間は、畜産学科一年生は夏季に厚木農場での合宿実習、二年生は、厚木農場は通い通年実習と富士農場では夏季の合宿実習という変則的実習であり、当時の学生諸氏には大変不便をかけたこと思い出します。平成二年以降は、西側農場での乳牛、草地実習、東農場での肉牛、豚、家禽実習と総合的な畜産実習の始まりとなったわけです。さらに、平成十二年度からは生物学実験の野生動物学の演習も様々な動物や家禽が生息している富士農場にて行われるようになり、名実ともに人と動物のパートナーシップを学ぶことのできる実習場として機能し出しています。このように富士畜産農場は農大とともに、六十年を越える歴史を刻み、多くの農大関係者の努力で発展し、東京農業大学畜友会会員・畜産学科同窓会会員だけでなくオール農大生・農業大学交友会会員ならび教育後援会会員の皆様に“富士農場”の名で親しまれてきました。今後も教育・研究、研修、の実習場として充実、発展すると共に、本学関係者だけでなくより多くの皆様に愛される農場になることを願うとともに、非力ではありますが、畜産学科の教員として、畜産学科学生のよりよい実習場となるように尽力して行きたいと思っています。今春厚木キャンパスを卒業される厚木第二期生の皆様、卒業おめでとう。今後の活躍を祈念するとともに、厚木キャンパス整備、富士農場の充実に対しての篤い支援をお願いします。この四月には体育館が新設されますが、まだまだ勉学・生活環境の充実のため、在校生の皆様にもより一層のご協力をお願いします。

最後に、今年の第七九回東京箱根間大学駅伝第一日に、とうとう花の二区の服部氏のごぼう抜き記録が二九大会ぶりに順天堂大学の中川君に破られた。ちょっと寂しい気持ちがするが、近い日に本学農学部学生が箱根道を疾走する姿を応援できることを祈念して、とりとめのない話になりましたが、これまでとします。

収穫祭と阿波踊り

野生動物学研究室助教授
小川　博

厚木キャンパスの収穫祭に初めて参加しました。本学に奉職してから今まで、特定の学科には所属していなかったり、遠隔地に勤務していたりで、収穫祭に深く関わったのは学生時代以来でした。厚木キャンパスの収穫祭の印象は、規模は世田谷にはかなわないものの、活気が感じられるすばらしい収穫祭でした。世田谷の収穫祭から人気の家畜苑が消えて寂しいと思っていましたが、厚木キャンパスで再見できてうれしく思いました。体育祭にはまさに学生時代からの参加（応援だけ）ですが、遠くからの参加にもかかわらず、畜産学科からの参加者の多さはすばらしいと思いました。総合優勝は逃しましたが、参加者の多さや遠隔地からの参加というハンディキャップを考えると、まさに競技の部1位というのは誇らしい成績でした。伝統のある大学は多いと思いますが、農大のように古典的？かつ楽しい体育祭を続けている大学は珍しいと思います。参加したことのない学生諸君にはぜひ積極的に参加されることをお勧めします。中身のない学園祭が多い中、農大の収穫祭は学生と教職員参加型のすばらしい伝統を引き継いでいます。その中でも文化学術展はまさに教育研究機関としての農大の特色を示すすばらしい企画です。その文展で野生動物学研究室が銀賞を獲得したのは、学生諸君の努力を思うと本当にうれしい結果でした。

さて、収穫祭の少し前、徳島の老朋友から電話があって昔のことを思い出しました。収穫祭ではよさこいソーラン節がすばらしい演技を披露してくれましたが、我々は、学生時代に本場徳島の阿波踊りに農大連として参加したことがあります。当時の農大の学生は、地方出身者が多くて各県人会が活発に活動を行っていました。徳島県人会もその一つで、県人会で阿波踊りに参加するための浴衣、草履、女性用の笠、太鼓、鉦等一通りの道具を持っていました。ただ、いくら当時の徳島県人会といっても阿波踊りに参加できる人数は少なく、私の友人は研究室の仲間に声をかけたのでした。私は夏休みということもあって、四国旅行を兼ねて実家の愛知県から軽トラックで徳島まで行きました。友人の家は徳島市内から山道をひとしきり走って、道を間違えていないか少し不安になった頃に到着しました。神山町左右山という地名通り、左右を山に囲まれたすばらしい場所でした。ここで研究室の仲間達と合流し、翌日の阿波踊りに参加したのでした。阿波踊りの当日は、浴衣に着替え、県人会の友人達から、踊り、太鼓と鉦のたたき方の簡単なレッスンを受けると早速町へ繰り出しました。関係ないところでやると恥ずかしいのですが、本場で踊ってみるとなかなか楽しいものです。地元の踊り手は独特の振りを披露するのですが、踊りを知らなくても何となくそれらしく踊れるのが阿波踊りの良いところです。参加している他大学には大手の私大や有名国立大学等、名立たる大学が多く、それらの大学はなぜか某有名女子大と連を組んでいました。それを横目で見ながら町を踊り歩くのは少し寂しいものでした。目抜き通りの審査会場は総勢十数人の農大連には辛い場所なので、我々は専らゲリラ的にいろいろな場所へ出没しました。今思うと楽しい思い出ですが、農大連はその次の年を最後に参加しなくなったそうです。それで、友人からの電話ですが、阿波踊りグッズが回り回って、友人の家にあるというのです。それで誰か使いたいものはいないか連絡をくれたのでした。考えてみると、東京でも阿波踊りをやっているところがあるし、収穫祭の宣伝パレードにも使えると思います。究極的には農大連を編成して本場の阿波踊りに参加というのもできます。誰か興味のある人はいないでしょうか？いたら協力しますので、申し出てください。

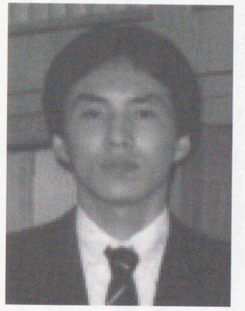
偽り（?）のホームページ（HP）の危機

家畜繁殖学研究室助教授
桑山岳人

偽りの（?）HPとは

東京農業大学の公式HP（http://www.nodai.ac.jp/）の中の教育研究を開き、学部学科一覧を開き、畜産学科を開き、家畜繁殖学研究室の僕のHPを開くと。偽りの（?）HPを見ることが出来る。しかし、偽り（?）とある写真の脚注にはきちんとその撮影年月日が入れてある（注意：写真は学生時代のものである、1984年撮影）。従って、HPの写真を毎日アップデートしている人は殆どいないし、平気で10年位前の写真を載せている人に比べれば、僕の写真は正直なものである。但し、その写真を見た人は、現在の僕の風貌を想像しなければならない。

問題の写真



偽りの写真の意味

この写真は、僕が大学4年生の時の卒業式後に研究室で撮影したものである。なぜ、僕がこの写真にこだわるのか。それは、卒業論文で手がけた研究は大学3年次の冬から開始し、そのいろいろな装置を手作りで作り上げたことから始まる。僕の卒業論文への思い入れは相当なものだった。家畜繁殖学研究室の学生は、『動物の観察をしっかりとすることから発見が始まる』と言う事を心得ている。これは、初代学長の横井時敬先生が『稲のことは稲に聞け』と言う言葉を残されたが、それと全く同じ事を意味する。僕は毎日動物舎に通い、講義時間以外は動物を観察したものである。多少残念なのは現在の学生は当番や実験以外の時には、あまり動物舎に通っていないようである。とは言え、家畜繁殖学研究室の学生は動物と接する時間は長い。少し、前置きが長くなってしまったが、HPの写真は、僕自身への戒めでもある。20歳代は、動物とよく観察し、失敗を恐れず前進あるのみだった。しかし40歳を過ぎてその2つとも学生に負けている。ちょっと悲しい気もするが、時間的余裕も少なくなってきた現在、それでも時間を有効に使うようにして、2つの事を心がけるようにしている。その気持ちを忘れないように僕はHPに学生時代の写真を未だに使用しているのである。

国内外からのHPに対するの意見

しかし、僕のHPに対する意見は非常に厳しい、特に学生からは厳しい。『先生の写真は詐欺ですよ』とまで言われている。その度に、脚注に書いてあるじゃないかと言い訳をしているのだが、この間も国外の友人からも同様の内容のEmailを受け取った。彼にも、同様の言い訳をしたが、偽りの（?）HP存続のピンチである。

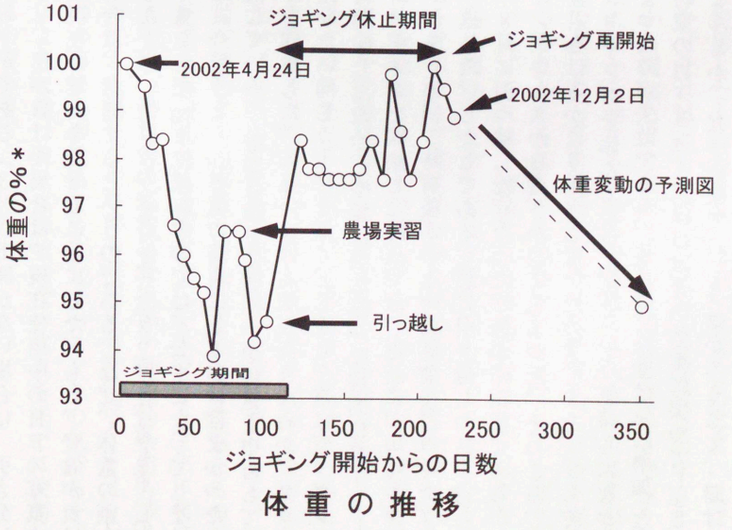
偽りの（?）HPとはを守るための賭けとHPの死守

さて、個人的な話で申し訳ないが僕は今年で結婚10年を迎えた。だいたい、結婚をすると太ると言われるが、僕もその例外に漏れず年に1kgづつ体重が増えてしまった。特にこの1年間では3kgも増えてしまった。なぜ、太る？それはよく食べるからである。結婚前は、ジョギングを週に3〜4日やっていたのだが、結婚して子供が産まれてからは、ジョギングをさぼってしまっていた。しかし、食欲はなかなか衰えない。僕の周りの学生はよく知っていることだが、僕はめん類が大好きである。特にラーメンは大好きである。もちろん、インスタントラーメンやカップ麺も大好きである。夜食や間食についつい食べてしまうのである。特に厚木キャンパスに移ってからは昼食+カップ麺と言うのが定番になってしまった。しかし、これでは健康管理は出来ない、しかし食欲も押さえられない。そこで、ジョギングを再開することにした。でも、意志の弱い僕は、ジョギングを続けられるかわからない。そして、大学院生の登健太君と賭けをしたのである。収穫祭の11／3までにどちらが体重の割合を減らすかである（3%以上開かない場合は、引き分け）。もし、僕が負けた場合は、現在使用中のHPの写真の隣に現在の写真を載せることにした。もし、登君が負けた場合は、禁煙するというのである。なぜ、体重の割合にしたかは、僕はその登君に比べ背も高く体重も重いので、体重をただkg単位減らすのでは不公平になってしまうから（今思うと、kg単位の勝負にしておけばよかったと後悔している）。毎週月曜日に御互いが体重を申告してグラフを作成した。御互いにけん制しあうためか、グラフはだいたい同じカーブを描く、しかし、僕はジョギングを再開始したため、序盤は当然僕が圧倒的にリードした。ジョギングを開始した時点では、近所にジョギングコースがあり毎朝5時前後から1時間半前後ジョギングを繰り返した。しかしである、急に引っ越しの話が持ち上がり8月に引っ越した。たった、僅かの距離であるがジョギングコースから遠ざかってしまった。そのころ、僕は登君をはるかにリードしていたので、まあ、少しくらいジョギングを休んでも良いかという気持ちになってしまったのが失敗である。体重は、今度は急に増加し始め、約束の11／3近くにはほぼ元の体重に戻ってしまった。なんとか、食事制限で11／3はかろうじて、賭けはドローに持ち込むことが出来た。しかし、登君とはもう1つの約束がある、その約束はここでは明らかにしないが

きっと登君が達成してくれるものと期待している。

収穫祭も終わり11月も下旬を迎え、僕はジョギングを再開始した。それは、当初の目的とはちょっと違ってきた。ジョギングコースはしっかりとしたコースで、時々大通りを横断する以外は車と出会うことはない、約1時間半のジョギングでいろいろなことを考えられる、その大半は、自分自身のこと、家族のこと、そして学生のことである。これが、ストレスの発散になっているようだ。時々、寝坊して朝の忙しい時間に家族に迷惑をかけることもあるが、何とかジョギングはこれからも続けていきたい。

最後に、御参考までに、賭けの期間中の体重の変動とこれからの予測をグラフにして文章を終わりたい。



体重の推移

＊ジョギングの開始時の体重を100%とした

集う学友

「農大にRADISH(大根)あり。」

4年　赤間　由樹子

三年間の浪人生活の末、農大に入学してすぐ、全學応援團チアリーダー部に入部することになった。練習は世田谷であった為、厚木での授業後、世田谷へ直行し、終電頃再び厚木に戻ってくる…というのが日常となった。呆れることにこの生活を大学四年の十二月まで続けた。当然卒論はそっちのけである。豚の屠殺もばっくれた。反省はしているが、後悔は全くしていない。周囲より実年齢的に遅い青春をチアだけで謳歌し切った。幸福なことに自分が馬鹿だった事、そして何よりチアリーディングを、応援團を、母校農大を心底愛してしまった事…のめり込んだ理由はそこにある。

我がチアリーダー部は、チーム名を「FIGHTING RADISH（戦う大根）」と言う。RADISHの一年は、四月入団式、五月大会、夏合宿。収穫祭を挟んだ九～十二月は最も忙しかった。「寝て起きてチア」といった日々。世田谷、厚木両収穫祭でのステージに向けた練習に加え、週末は宣伝活動や地域イベントでの演技披露。収穫祭当日はステージの他に、模擬店、文展、体育祭にも参加し、我が校最大のイベントを完食した。同時期には各運動部の応援も並行した。特に今年は熱かった！特に東都大学野球秋季リーグ二部三部入れ替え戦、箱根駅伝予選会…応援團という立場から、幾つもの戦いのドラマを直で見てきた。自分の方が幾度奮い起たされたであろう。そして十二月の全日本チアリーディング選手権大会「農大大根根性」を出し切って、見せ付けて、燃え尽きた。チアリーダーとして応援してきた自分達が、最後には多くの人達に応援されながらの最高の引退舞台であった。

精神的疲労を感じたことはない。チームカラーの緑と白のユニフォームに身を包むと、我が身は正に農大の象徴である「大根」そのものであり、重くも多し母校の歴史と伝統を受け継ぐ担い手であるという責任と誇りが、我々の最大の原動力となっていたからだ。応援を通じ、勝利の喜びと敗北の悔しさを共有し合った兄弟を得た。チアリーディングを通じ、一生涯信頼できる姉妹を得た。

母校農大。自分は確かにこの場所で、泥に塗れながらも純白に光輝くRADISH（大根）であった。

文展をほんのちょっとだけふり返って

3年　太田真琴

私の所属する野生動物学研究室は、第3回収穫祭文化学術展に於いて、銀賞を獲得することが出来ました。決して平坦な道程ではありませんでしたが、あの歓喜の輪の中心に加われたことを心から光栄に思っています。詳細は省きますが少しだけ振り返ってみます。

「文展やるからには、絶対に賞を取って野動研がこれだけやれるということを見せてやろう。そして、野動研に入りたくても入れなかった人のためにも俺達が頑張っているところを見せないと。」

五月、この、三好一郎学年長（現幹事長）の一言で、二十九人の負けず嫌いが1つにまとまりました。その後に行われた出展団体代表者二人を決める投票で、何故か私が選出されたのです。いきなり、あまりに重大な役職を任されてしまい、何をどうすればよいのか判りませんでしたが、私の他にもう一人選出された大橋孝弘君が、私が携帯電話を持っていないという理由だけで代表という重責を引き受けてくれたため、私は気楽に文展に臨むことが出来たのです。紆余曲折の末、何とか無事企画書を提出できましたが、簡単には事が運びませんでした。モグラが相次いで死んだことも、私がエレベーターの中で熟睡したこともありました。しかし、周りの皆が支え引っ張ってくれ、また頻繁に暴走を繰り返した私の軌道修正も度々行ってくれました。お陰で、私は自分の仕事に集中して取り組むことができ、満足のいく状態で収穫祭当日を迎えることが出来たのです。

結果は、冒頭の通りでした。この銀賞は、二十九人全員が一致団結し、1つの目標に向かって勇往邁進した結果です。ただ発表しただけでなく、自分たち一人一人にとって何らかのプラスになった点が必ずあったと思います。また、他の出展団体が頑張っている姿を見て、自分達ももっと頑張ろうと切磋琢磨できた事も大きいと思います。それなくしては、今回の受賞もなかったのかもしれません。

今回の展示は、先生方や多くの先輩方のご指導、ご協力によって成り立ちました。ここに謹んで感謝の意を表します。有難うございました。今回我々が果たせなかった金賞受賞の夢は、優秀なる新三年生が必ず成し遂げてくれるものと信じています。

イルカにまつわるエトセトラ

2年　伊従留南

1年生のボランティア概論の授業の後、教室の前には、特別講師の岩重先生を囲んで大きな人だかりが出来ていた。岩重先生はベトナムでイラワジイルカの研究をしている。先生と私たちの週1回の勉強会は、その場の思いつきで始まったようなものだった。4回目の勉強会の後、雑談で国内の野生イルカをテーマに夏休みの自由研究をしようという話になった。せっかく研究するのだから、収穫祭で発表しようということにもなった。ターゲットは千葉県銚子港沖の「スナメリ」背びれも背もない、体長180cmほどのちみぃーなイルカだ。

岩重パワー全開。その人脈から銚子海洋研究所の宮内さんの協力を得ることができた。台風が近づいていた。宮内さんの船に乗って海に出ると、船は波にもまれて大揺れに揺れた。救命胴衣をしめる紐に腹部が圧迫され、今にも口からナニカが出てきそうだった。風、私の三半規管も胃袋も限界だったが、ノッてしまえば気分はもう海の男。タイタニックポーズなど念頭には無く、船の先端に仁王立ちして自分がフンドシ姿でない事にがっかりする。そんな感じだった。

「ああ、いるね。」

突然、宮内さんが指さした。今さらそっちを向いても悲しく大波が見えるだけである。船は円を描くように航行し、再びスナメリが現れるのを待った。

突然、本当に何の前ぶれもなく、遂にスナメリは出た。灰色のいかにもつるりとした背中。そして親子の潮噴き。

スナメリが姿を見せる度船には歓声が起こった。テープレコーダーを握る私の手は汗でじっとり濡れ、噴き込んだ声は、後で聞いたらどうしようもない位震えていた。ああ、なんて表現したらいいんだろう。とにかく感動。すごい。綺麗。やべぇ、アタシ動物好きだ。知りたい。勉強したい。

最初はもう、その姿に酔っちゃってただ呆然。正気に戻って落ちついて、慌てて記録をとった。時計を見るその時間が勿体ない。スナメリが潮噴くのは本当に一瞬で、海から目をはなす時は貞子も恐がる程のスリルを感じた。

潮噴きののべ回数や、個体と親子連れの潮噴きの違い等を観察した。残念ながら、台風の影響で予定よりも海に出る回数は減ってしまったが、素晴らしい感動だった。

収穫祭は大成功。前日までいっぱいいっぱいになりながら、展示物を作ったが、何もかもが最高に充実していた。私を支えてくれた全ての人、イルカや海の自然にも、心から感謝します。ありがとう。（ビバ農大！）

同好会

2年　林　晋平

私が空手道の同好会を作ろうと思ったのは一年生の秋。農学科で同じ空手道場に通うK君を半ば無理矢理に誘い、年明けから活動を始めた。

練習の初日に集まった人は全部で七人。次の週の練習では四人になっていた。こんなもんだとは思っていたが、このままでは同好会として承認されない。部活の昇格をも視野に入れていた私は、新入生の勧誘に力を入れることにした。

そして、四月の新勧の日。純白の空手着に身を包んだ私は、手当たり次第に新入生に声をかけた。

「目標は十人。女の子にもどんどん声かけて！」

事前に、そう仲間に言っておいた。また、部活の昇格を目指していることは、敢えて言わないことにした。それを説明すると、厳しいイメージばかり持たれると思ったからだ。しかし、これが後々後悔することになる。

新入生を迎える初めての練習日。予定の時間になっても誰も来ない。十分程度遅れてK君がやって来た。

「誰も来てないんっすか？」

彼はそう言うと、黙々と空手着に着替え始めた。二人を沈黙が包む。「やっぱダメかな？」私が諦めかけた時、二人の男子学生が現れた。新歓の日、直接話を聞きに来てくれた子たちだ。有無を言わせず、

「一緒にやろう。」

彼らの手をつかんで言った。さらに数分後、現れたのは二人の女の子。

「一年生の方ですか？」

私が問い掛けると、

「いえ、畜産の二年生です。同じクラスですよ。」

新入生以外の人が来たのは予想外だったが、それよりも、一年間同じクラスにいながら、顔も知らなかったことに対して自分を恥じた。

それから一ヶ月後。会員は二十五名にもなっていた。これほど人が集まるとは、活動当初、想像もできなかったことである。しかし、徐々に練習を厳しくしていき、部活昇格への考えを話すようになると、練習を休む子が多くなってきた。そして、後期になると何人かが辞めていった。理由はわかっている。辞める子が出る度に自責の念に駆られた。

ある時、仲間の一人に問われたことがある。

「どうして、そんなに部活にしたいの？」

・・・答えられなかった。なぜ？わからない。別に同好会のままでもみんなと空手はできる。部活になれば面倒なことも増えてくるだろう。ただ、この農大に入り、大きなことを一つ成し遂げたい、そんな思いが私の心の中にあった。

同好会作って一年が経つ。辛いこともあったが、楽しい仲間たちと出会えて本当に充実した日々だった。この先、我が同好会“松涛館空手道”が、どのような形になるかはわからないが、みんなと力を合わせて歩んでいきたい。

平成13年度畜友会決算報告

（平成13年６月１日～平成14年５月31日）

一般会計の部

収入の部

科目		予算額（円）	決算額（円）	差額（円）	備考
会費	新入生	2,000,000	0	2,000,000	
	編入生	30,000	5,000	25,000	*) 5,000×1
	過年度分	1,160,000	100,000	1,060,000	*) 10,000×10
雑収入		0	2	△2	利息
当期収入合計（A）		3,190,000	105,002	3,084,998	
前期繰越収支差額		1,886,454	1,886,454	0	
収入合計（B）		5,076,454	1,991,456	3,084,998	

支出の部

科目	予算額（円）	決算額（円）	差額（円）	備考
収穫祭援助費	760,000	760,000	0	特別会計に繰り出し
ふじみの印刷費	430,000	428,000	2,000	
卒業祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業記念品費	450,000	0	450,000	*1）
新入生歓迎会費	200,000	21,944	178,056	*2）
消耗品費	50,000	7,592	42,408	
通信運搬費	150,000	4,813	145,187	
雑費	70,000	20,315	49,685	
予備費	230,000	0	230,000	
当期支出合計（C）	2,540,000	1,442,664	1,097,336	
当期収支差額（A）－（C）	650,000	△1,337,662	1,987,662	
次期繰越収支差額（B）－（C）	2,536,454	548,792	1,987,662	

*1）支払いが遅れたため次年度（14年度）に支払い（367,500円未払い）

*2）料理代金（140,000円）未払いのため

上記のとおり報告する。

平成14年７月12日

畜友会会長　古川　徳　㊞

平成14年度畜友会事業報告

平成14年

７月17日　平成14年度畜友会定期総会

７月26日　平成14年度畜友会定期総会（継続）

８月５日　１年生対象　収穫祭説明会（於富士畜産農場）

10月10日　第３回厚木キャンパス収穫祭畜産学科統一本部本部開き（於食堂・けやき）

11月１日　第３回厚木キャンパス収穫祭前夜祭参加

11月２日～３日　第３回厚木キャンパス収穫祭参加

11月５日　第111回体育祭参加

11月20日　第３回厚木キャンパス収穫祭畜産学科統一本部慰労会（於食堂・けやき）

平成15年

３月19日　畜友会誌「ふじみの39号」発刊

３月20日　卒業祝賀会・卒業記念品贈呈（於厚木キャンパス）

４月下旬　新入生学外オリエンテーション参加

５月上旬　新入生歓迎会

平成14年度畜友会予算

（平成14年６月１日～平成15年５月31日）

一般会計予算

収入の部

科目		予算額（円）	前年度予算額(円)	差額（円）	備考
会費	新入生	2,000,000	2,000,000	0	
	編入生	122,500	30,000	92,500	※1)
	未収分	3,160,000	1,160,000	2,000,000	※2)
雑収入		0	0	0	
当期収入合計(A)		5,282,500	3,190,000	2,092,500	
前期繰越収支差額		548,792	1,886,454	△1,337,662	
収入合計(B)		5,831,292	5,076,454	754,838	

※１）編入生　２年生　7,500円×５人
　　３年生　5,000円×13人
　　４年生　5,000円×４人

※２）１年生　10,000円×240人
　　２年生　10,000円×　31人
　　３年生　10,000円×　24人
　　４年生　10,000円×　21人　計316人

支出の部

科目	予算額（円）	前年度予算額(円)	差額（円）	備考
収穫祭援助費	700,000	760,000	△60,000	
ふじみの印刷費	430,000	430,000	0	
卒業祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業記念品費	450,000	450,000	0	
新入生歓迎会費	200,000	200,000	0	
消耗品費	50,000	50,000	0	
通信運搬費	150,000	150,000	0	
雑費	70,000	70,000	0	
未払金	507,500	―――	507,500	※3)
予備費	230,000	230,000	0	
当期支出合計（C）	2,987,500	2,540,000	447,500	
当期収支差額(A)－(C)	2,295,000	650,000	1,645,000	
次期繰越収支差額(B)－(C)	2,843,792	2,536,454	307,338	

※３）前年度の卒業記念品代金367,500及び
　　新入生歓迎会料理代金140,000が未払いのため

特別会計収支報告

（平成13年６月１日～平成14年５月31日）

第２回厚木キャンパス収穫祭

収入の部

科目	予算額（円）	決算額（円）	差額（円）
一般会計より	760,000	760,000	0
雑収入	0	193	△193 ※
当期収入合計(A)	760,000	760,193	△193
前期繰越収支差額	294,267	294,267	0
収入合計(B)	1,054,267	1,054,460	△193

支出の部

科目	予算額（円）	決算額（円）	差額（円）
統一本部	350,000	345,680	4,320
特別企画	50,000	49,653	347
体育祭	70,000	65,591	4,409
宣伝隊	200,000	173,197	26,803
装飾	50,000	12,381	37,619
家畜苑	150,000	100,101	49,899
予備費	45,000	27,090	17,910
当期支出合計(C)	915,000	773,693	141,307
当期収支差額(A)－(C)	△155,000	△13,500	△141,500
次期繰越収支差額(B)－(C)	139,267	280,767	△141,500

※前年度まで未記入の貯金利息を含む。

平成14年７月12日

監事
近江弘明　　松岡昭善
三本松良子　　桐生茂昌

監査報告書

畜友会会則第９章、第29条及び30条の規定に基づいて平成14年７月12日に平成14年度業務及び会計監査を実施致しました。

事業報告書、会計諸帳及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

平成14年度畜友会役員

（平成14年６月１日～平成15年５月31日）

役　職	氏　　名	研　究　室
会　　長	古　川　　徳	畜産物利用学研究室
副会長	栗　原　良　雄	家畜飼養学研究室
副会長	渡　邊　忠　男	家畜衛生学研究室

委員長	３年　市　川　方　啓	畜産物利用学研究室
副委員長	３年　佐　伯　勇　一	家畜生理学研究室
	２年　後　藤　隼　人	
書　　記	３年　宮　崎　美　帆	野生動物学研究室
	２年　磯　田　明　里	
会　　計	３年　駒　板　明　海	家畜飼養学研究室
	２年　飯　田　真　希	
渉　　外	３年　櫻　井　義　久	家畜飼養学研究室
	２年　藤　本　泰　朗	
企　　画	３年　横　川　暁　士	家畜育種学研究室
	２年　山　川　将　弘	
庶　　務	３年　酒　井　孝　徳	家畜飼養学研究室
	２年　菅　原　佳　宏	
編　　集	３年　富　田　裕　子	家畜生理学研究室
	２年　石　井　淳　子	
監　　事	近　江　弘　明	家畜衛生学研究室
	松　岡　昭　善	畜産物利用学研究室
	３年　高　木　香　苗	家畜衛生学研究室
	２年　飯　塚　さやか	

特別会計予算

（平成14年６月１日～平成15年５月31日）

第３回厚木キャンパス収穫祭

収入の部

科　目	畜友会援助費			農友会厚木支部助成金			合　　計		
	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)
一般会計より	700,000	760,000	△60,000				700,000	760,000	△60,000
雑収入	0	0	0				0	0	0
畜産学科統一本部				200,000	250,000	△50,000	200,000	250,000	△50,000
家畜苑				※1) 800,000	※2) 800,000	0	※1) 800,000	※2) 800,000	0
装飾				※3) 未定	100,000	△100,000	※3) 未定	100,000	△100,000
当期収入合計(A)	700,000	760,000	△60,000	1,000,000	1,150,000	※3) △150,000	※3) 1,700,000	1,910,000	△210,000
前期繰越収支差額	280,767	294,267	△13,500				280,767	294,267	△13,500
収入合計(B)	980,767	1,054,267	△73,500				※3) 1,980,767	2,204,267	△223,500

※) 農友会厚木支部の助成金は、上記の部門ごとに割り当てられます。
※1) 鋼管代を含む
※2) 鋼管代を除く
※3) 装飾は学内装飾として割り当てられているため、本年度畜産学科統一本部に配当される金額は未定です。

支出の部

科　目	畜友会援助費			農友会厚木支部助成金			合　　計		
	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)	予算額(円)	前年度予算額(円)	差額(円)
統一本部	400,000	350,000	50,000	50,000	100,000	△50,000	450,000	450,000	0
特別企画	70,000	50,000	20,000	50,000	50,000	0	120,000	100,000	20,000
体育祭	70,000	70,000	0	50,000	50,000	0	120,000	120,000	0
宣伝隊	150,000	200,000	△50,000	50,000	50,000	0	200,000	250,000	△50,000
装飾	50,000	50,000	0	※3) 未定	100,000		50,000	150,000	△100,000
家畜苑	150,000	150,000	0	※1) 800,000	※2) 800,000	0	※1) 950,000	※2) 950,000	0
予備費	45,000	45,000	0	0	0	0	45,000	45,000	0
当期支出合計(A)	935,000	915,000	20,000	1,000,000	1,150,000	※3) △150,000	1,935,000	2,065,000	※3) △130,000
当期収支差額(A)－(C)	△235,000	△155,000	△80,000				△235,000	△155,000	△80,000
次期繰越収支差額(B)－(C)	45,767	139,267	△93,500				45,767	139,267	△93,500

※) 農友会厚木支部助成金については、残金は返却するため、次期繰越はありません。

第三回厚木キャンパス収穫祭・第一一一回体育祭
事業報告及び結果報告

【事業報告】統一本部

畜産学科統一本部の第3回厚木キャンパス収穫祭での活動内容は、収穫祭、宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）の活動は、先生方と連絡をとり、それぞれ各部門の委員長及び、第3回厚木キャンパス収穫祭実行委員会、農学科統一本部、そして世田谷キャンパス13学科統一本部との連絡を取り、畜産学科統一本部をまとめ、今年厚木キャンパスでの3回目となる収穫祭、そして一一一回体育祭を成功させようと最後まで努力しました。

今年は晴天にも恵まれ、昨年を越える来場者数であり、皆様のご協力のもと無事に成功させることができました。

来年は、今までの経験をフルに生かし、第4回厚木キャンパス収穫祭を盛り上げられるよう全部門と一致団結して活動していきたいと思います。



特別企画

今年も去年と同じく、地域の方々も参加して楽しんでいただけるようなステージを企画・運営しました。

収穫祭に来て頂いた方全員が参加できるステージ外企画『農大クエスト』をはじめ、地域の方々による『子供太鼓』、『相模里神楽』、毎年恒例になったカラオケ企画『陽気な畑の歌謡祭』、クイズ企画『ドン☆ドン☆ドン』、毎年テーマを変えて行われる『プチ講座（今年のテーマはサツマイモでした）』、研究室対象の『幸せ農大研究室計画』、女装コンテスト『メンズビューティー』なども例年通りの盛り上がりをみせ、今年新たに企画したその場にいた人全員が回答者である○×形式のクイズ企画『農大クイズダービー』、模擬店を対象として模擬店のコマーシャル時間を競う『ステ☆コマ』もなかなかの盛り上がりをみせました。それに、今年は去年の『ミスコン』にかわり『ミスターコンテスト』もありました。去年は途中から雨が降ってしまったためにトリニティーホールで行われた、オホーツクキャンパスの生徒による『YOSAKOIソーラン』や『リーダー公開』も今年は天候にも恵まれ、野外ステージで行うことができ、大勢の方々にみてもらうことができました。



宣伝隊

東京農業大学農学部が厚木にあり、そして収穫祭が行われるということをより多くの方に知ってもらうために、今年も数多くの宣伝活動を行ってきました。

8月3日には厚木鮎まつりDANBEパレードに参加し、本厚木の駅前を農大名物青山ほとりで行進しました。また9月中旬からは畜産学科の伝統である木造の御輿づくりを始めました。この御輿を担いで経堂の農大通りで行われた経堂パレードに参加し、見事第2位という成績をおさめました。9月下旬から10月下旬の土日を利用して本厚木、海老名、小田原などの駅前、厚木近辺の公園や厚木商工観光まつりなどで宣伝活動を行い、ビラ、植物の種、ポプリや野菜などを配布し全学応援団によるリーダー公開などを行ってきました。

また、農大生への収穫祭への呼びかけのためにけやき前において円陣青山ほとりを行いました。収穫祭当日も野菜の無料配布を行うなどの活動の結果今年は昨年以上のご来場の方々を迎えることができました。





体育祭

体育祭は毎年世田谷で行われ、各学科対抗の応援合戦がある。畜産学科では特に応援合戦に力を入れて伝統である空手に似た舞を行っている。

9月中旬頃から団長、副団長を中心に舞を考え、今年は「スピード」「統一性」「流れ」の3つをテーマに舞を考えた。それとともに参加者を募集し、主に夕方から深夜にかけて練習し舞の形を覚える。その中で皆で意見を出し合い手や足の向きや角度など細かい部分を統一していく。10月下旬頃ある程度できるようになってくると全体であわせて舞ってみて、その中でまた試行錯誤を繰り返しより完成度の高い舞を作り上げていく。

そして、本番11月5日の日。不安をうち消すために全員が直前まで積み重ねてきた練習を体に刻みつけていく。本番は力いっぱい楽しくみんな心を1つにして舞った。

今年も多くの観客をわかせた。



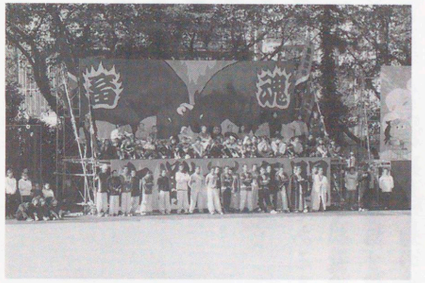


櫓装飾

「櫓」とは、体育祭開催時に使われるいわゆる「応援席」のようなもので、学科ごとに造られる大きな台の事です。大きさは高さ約５ｍ50×幅約９ｍ×奥行き約３ｍで、金属の管を組み立てたところに板を何枚も組み合わせて描いた大きな絵を貼り付けた物です。

まず図案を考え、それを今年はＯＨＰを使って板に下書きをし、そして絵を完成させたものを世田谷キャンパスに搬入して皆で櫓を組み立てて作り上げました。

櫓の絵は各学科の特色が出るのですが、今年は畜産学科らしいものをと思い、日本の「闘牛」を描きました。

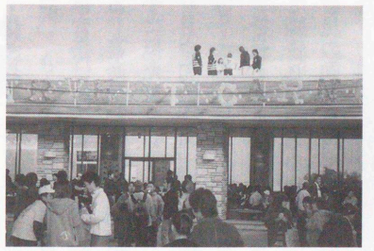


研究棟アート

駅の方からも見える研究棟の壁に装飾をしました。

９月下旬頃から準備を始め縦14Ｍ×横29Ｍの大きな壁に布にペンキで絵を描いたものを24枚つなぎ合わせて装飾しました。研究棟の上の柵にも「第３回収穫祭“Ｙｅｓ、愛農”」の文字を30Ｍの布に書きました。

また、ステージや模擬展から見えるけやきの屋根の上にも「ＨＡＲＶＥＳＴ　ＣＡＲＮＩＶＡＬ」という文字をダンボールにわたをつけて作りました。そのまわりには風船をつけて収穫祭が楽しい雰囲気になるように装飾しました。





家畜苑

今年の家畜苑はホルスタィン、黒毛和種、水牛、豚、リャマ、家禽、鶏、ダチョウ、また、ちびっこ動物園として緬山羊、ウサギ、ヒヨコを展示しました。

家畜をより身近に感していただくために、今年は昨年以上に動物とのふれあいを大切にしました。ちびっこ動物園では多くの子供がヒヨコを手にとり、編羊、山羊をさわつて喜んでいる姿が見受けられ、水牛に乗るお客さんも大勢いました。

ホルスタイン・黒毛和種・豚・ダチョウにおいては昨年に比べ小さくお客さんにとっては親しみやすかったようです。

ヒヨコの羽化を見せる箱の前では、普段なかなか見ることのできない光景からか絶えることなく人だかりができていました。

多くの方々に家畜をより親しんでいただくことができたと思います。



【結果報告】

宣伝隊
農大通り賞……2位

体育祭
総合順位……3位
競技の部……優勝
棒引き（女子のみ）…第1位
各学科対抗リレー
（女子の部）……第2位
つな引き……第3位
櫓装飾の部……11位
応援の部……6位

東京農業大学農学部畜産学科
“畜友会” 会則

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。

第二条　本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。

第三条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章　業務

第四条　本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。

(1)会員相互の親睦
(2)講習会、研修会及び研究会発表の開催
(3)機関紙「ふじみの」の発行
(4)大学行事（収穫祭等）への参加
(5)その他第三条に付帯する業務

第三章　会員及び役員

第五条　本会の会員は次の通りとする。

(1)正会員　畜産学科の学生
(2)特別会員　畜産学科教職員並びに大学院生
(3)名誉会員　役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第六条　本会は次の役員を置く。

(1)会　長　1名
(2)副会長　2名
(3)執行委員
　委員長　1名
　副委員長　2名
　書　記　2名
　会　計　2名
　渉　外　2名
　企　画　2名
　庶　務　2名
　編　集　2名
　監　事　4名

第七条(1)会長は会を代表し、会務を総理する。
副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。
また1名は総務を他の1名は会計を分担する。

(2)委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。
副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条(1)本会には連絡委員を置く。
(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条　役員および連絡委員の選出および任期
(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。
副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。
(2)新執行委員会は、現執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、他の1名を2年次生より選出するものとする。
尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。
(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。
(4)連絡委員は、各学科〔1、2年次〕および各研究室〔3、4年次〕で協議のうえ選出する。
また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章　総会

第十条(1)総会は定期総会と臨時総会とする。
(2)総会は正会員および特別会員をもって構成され、本会の最高意思決定機関とする。
(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。
(4)臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条　総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条(1)総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。
(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。
委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員数の五分の一を上限とする。
(3)委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条　定期総会は次の事項を決議する。
①前年度の事業報告および収支決算報告
②次年度の役員
③次年度の事業計画および収支予算

④会則の改正
⑤その他

第十四条　総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条　議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条　総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条　総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章　執行委員会および連絡委員会

第十八条(1)第六条(3)の執行委員は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。
(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条　執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が務め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条　執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条　執行委員会で議決された事項について、委員長は会長および副会長に文章で必ず報告する。

第二十二条　連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。
(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。
(2)連絡委員会は次の事項を処理する。
①執行委員会で決定した事項の伝達。
②一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。
(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席する事ができる。

第二十三条　本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第六章　会計

第二十四条　本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以てこれにあてる。
但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条(1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。
但し、一度納入した会費は返金しない。
しかし、入学取消しの場合はその限りではない。
(2)会費は会長および委員長連名で毎年3月に入学対象者に対して請求するものとする。

第二十六条　本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章　機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条(1)第4条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。
(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。
(3)編集委員会の責任者は編集委員の内1名が担当する。
(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章　大学行事への参加

第二十八条(1)第4条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。
(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。
尚、内規は別に定める。
(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章　監査

第二十九条　監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条　監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。
尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

第十章　付則

第三十一条　本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条　本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを施行する。

畜友会収穫祭内規

第一章　目的

第一条　本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第２８条によりこれを定める。

第二条　東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第１条および第９条に基づく収穫祭に参加する。

第二章　組織および役員

第三条　収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後６本部と称す）。

1．統一本部　　若干名
2．宣伝隊実行本部　　1名
3．特別企画実行本部　　1名
4．学内装飾実行本部　　若干名
5．家畜苑実行本部　　各1名
6．体育祭実行本部　　各1名

第四条　実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

会長　　1名
副会長　　2名

第五条(1)会長は畜友会会長がこれにあたる。副会長は畜友会副会長がこれにあたる。

(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より会長がこれを委嘱する。

(3)統一本部委員長は畜友会執行委員がこれにあたる。統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、会長および各実行本部顧問の了承を得てから委嘱する。

(4)統一本部および各実行本部の担当者は正会員の中から募集し、統一本部委員長がこれを委嘱する。

第六条(1)会長は会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときはこれを代理する。

(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

(3)統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者と協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。

(4)各実行本部責任者は各実行本部の運営を担当する。各実行本部副責任者は各実行本部責任者を補佐すると共に各実行本部担当者と協力して円滑な運営・実施にあたる。

第七条　実行委員会の機関として６本部会議および各実行本部会議を置く。

(1)６本部会議は会長、副会長、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部会計ならびに各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。６本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。

(2)各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部責任者がこれを務める。

第三章　会計

第八条　収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金ならびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九条　予算は畜友会執行委員会で編成し畜友会定期総会で承認を得る。

第十条　会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」によって処理する。

第十一条　決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章　付則

第十二条　本内規の改正は６本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会に諮った後、畜友会定期総会で承認を得る。

第十三条　本内規は平成１４年６月１日よりこれを実施する。

各部門委員長より

イェイ！イェイ！

統一本部委員長
3年　市川方啓

「市川、飲み会行く？。」

友達に誘われ、その日飲みに行く事にした。あまり大学の飲みを経験した事のなかった自分は、酔ってしまい先輩に

「体育祭の応援合戦やりますよ。がんばりましょう。」

などと言い、この組織に入る事が決定した。この飲み会で酔っ払い、安易に言った言葉が自分の大学三年間の大部分を占める畜友会との出会いだった。

この数日後から始まった一年の時の応援合戦の練習。別にやりたくて入った訳ではないので、当然やる気はあまりない。毎日、夜遅くまで練習をし、肉体的にも精神的にも限界に近づいていた。そんなある日先輩方からお叱りを受けた。この時自分は、もう辞めて先輩方を困らせてやろうかと正直思った。が、自分のきれいで純粋な心が辞めることをしなかった。一年の体育祭が終わった時には、苦しかった思いがすべてなくなり今まで味わったことのない充実感を得ることができた。

月日が経ち、自分は三年生になった。昨年、副委員長をやった自分は、今年委員長として第一一一回収穫祭を向かえる事になったのだが、正直迷っていた。昨年の先輩方の色に染まった統一本部をどういう色にしようかと。上下関係を厳しくし固い雰囲気を作るのか、それとも上下関係はあまりつくらず、一、二、三年生が友達の様なやわらかい雰囲気でいこうかなど色々考えた。今考えるとそれは無駄な悩みだったが、この頃は、どの色に染めるかが頭から離れなかった。

九月中旬になり、さっきの結論がでないまま、収穫祭に向けての準備作業が少しづつ始まった。皆んなと楽しく会話をしながら神輿を作り、終われば飯を食いに行ったり、飲みに行ったりと、とても充実していた。そんな生活をしていたある時、ふとした瞬間に悩んでいた答えが出ていることに気づいた。

“自分が楽しもう”

これは、かなりの自己中心的な考えだと思うが、しかし、自分は今年で、統一本部としての生活は最後。自分が思いっきり楽しんで周りも楽しめる様な空間ができればいい！と思ったのだ。

その後の準備は、いい雰囲気だった。自分でもいつ言ったのかわからないが、

「イェイ！イェイ！」

などという言葉が、皆んなに浸透し、皆んながその言葉の元に集まり、団結し、収穫祭に向けがんばった。

収穫祭が始まり、そして終わった。

今、思うことは、先輩方が築いてきた統一本部の色に、今年、自分の色を少し混ぜることが出来たのかなと思う。

いろいろ書いてきたが、自分の色が出せたのも、委員長としてやってこれたのも、それは全て、同学年のいい仲間達や、隼人をはじめとする後輩達がいたからこそである。本当にこの色は、自分がではなく、この仲間達でなるようにしてなった色なのだ。来年委員長である隼人には、自分が信じる道を、一所懸命駆け抜けてほしい。

流れ星の様にあっという間に過ぎ去った三年の収穫祭。一瞬でも激しく仲間と共に輝いたこの時を決して忘れないだろう。



特別企画なあたし★

特別企画委員長
2年　飯田真希

私は今年の4月から畜産学科統一本部に入り、特別企画委員長を任せられた。それまでのあたしは、実行本部の特企の1人としてのほほんと会議にでたり、担当の仕事をこなしていた。それが突然何かが起こってあたしに、特企委員長という役がまわってきたのだ!!

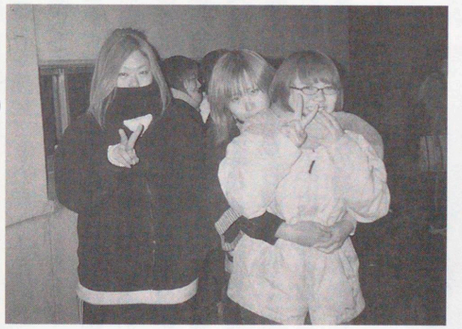
大学に入って、仲良しなお友達S子と一緒に実行本部の特企に入った。S子とは一緒に仕事して、一緒に会議さぼって、一緒に怒られて…2人でなんでもやらないと不安でいつも一緒にいた。そんな2人に第2回収穫祭が終わったころ、「2人のうちどっちかに統一本部の特企委員長をやってほしい。」って話が舞い込んできた。「自分ら必要とされている！」って喜んだのもつかのま。ここから3ヶ月間あたしたち2人は、脳がぐるぐるするくらいの苦悩を強いられることに…。お互い離れたくないという思いは同じなのに、特企としてやりたいことが違い、結論がなかなか出なかった。いっぱい泣いていっぱい悩んだ。そして出した答えが、「別々の本部（立場）から特企をよくしていこう。」だった。この答えが正解だったって思えるよう、満足いくステージをつくろう！S子とち

かった。

第3回収穫祭たくさんのお客さんがステージを見て、参加してくれた。お客さんと出演者と裏方が一体となった熱いステージ。見てくれる人がいる、参加してくれる人がいることでステージって完成するんだと思う。そんなステージができた時、特企最高って思う。この興奮は、ずっと忘れないだろう。私たちはそんなステージに3年間分のパワーをつぎ込む。

陽子へ。いつもたよりなかった委員長で大変だったよね。ゴメンね。しかも突然委員長にさせちゃって…。陽子は、やることちゃんとできる子だからあたしは、陽子でよかったと思います。今年はあたしが支えます。

修子へ。しゅーちゃん。うちら特企にいっぱい泣かされたねー。ホントー2年間いろいろあったね。今年もこんなあたしと、楽しいステージつくって下さい。今年こそうちらの出した答えが正解だってわかるよ。しゅーちゃん。今年も波瀾万丈よ。



ザ★トッキーズ



私の誇り

宣伝隊隊長
3年　富田裕子

“宣伝隊”とは、早く言えば“収穫祭の宣伝をする隊”である。15学科統一本部の学科宣伝隊が集まって結成されている。活動内容は、いろいろな駅でビラや野菜を配布したり、応援団にリーダー公開で大根踊りを披露してもらったり、時には自分達が浴衣を着て大勢の前で踊ったり…。今年は初の試みとして厚木市・海老名市内のお店をひたすら訪ねてビラとポスターを置かせて貰ったりもした。

宣伝隊に必要なものは①素敵な笑顔②大量の野菜を運ぶ為の腕力③ビラを貰ってもらえない虚しさに打ち勝つ強さ④分単位の緻密な計画を立てる能力⑤農大から一歩出たら農大生としての自覚を持って行動しようとする心⑥活動を省みて次に活かす努力、そして何よりも⑦農大生としての誇り、である。挙げればキリが無いけどそんな要素を備えた人達が集まってるから私は宣伝隊が大好き。

今年の収穫祭は厚木と世田谷が同日開催だった為、厚木宣伝隊のみでの活動が主だった。厚木宣伝隊はわずか8人だったけれど、少人数であったからこそ全員が活動

資料に目を通し、気になれば赤を入れ、全員が納得のいく活動にしようとした。意見が分かれることはしょっちゅうで、会えば宣伝活動の話、ケータイの着信・発信履歴が宣伝隊で埋まった事もある。次第に宣伝隊仲間は私にとって傍に居なくてはいけない、かけがえのない存在になっていた。自分の意見を主張する機会なんて今まであまり無かったのに「言わなきゃ損する。最後の年だから思いっきり自分の好きな様にやりたい！」と思って主張した。それも、小平さん、新井ちゃん、ユースケ、マキ、淳子、ヌマジ、薄井っていう最高のメンバーだったから出来たのだと思う。本当にいい仲間に恵まれたと思う。こんないい仲間と出会えて、一緒に活動できて良かった！

もう一つ、忘れちゃいけない仲間がいる。畜産学科統一本部の仲間（以下、学科とする）だ。宣伝隊は学科よりも他学科の宣伝隊と作業をすることが多い。だから私は準備期間中、学科の中で少しだけ孤独の様なものを感じていた。でも、うちら宣伝隊がどうしても人手が必要になった時、忙しいにもかかわらず学科がみんなで手伝いに来てくれた。うれしくてうれしくて涙が出そうだった。学科といると楽しいしホッとする。でも、それだけじゃなくて助けて欲しい時に助けてくれるのが本当の仲間なんだって私は思う。宣伝隊は学科のみんながいたから無事活動することができました。みんなありがとう

今までずっと仲間のことを書いてきたけれど、その中でも一番に私を慕ってくれていた（？）のが今年、宣伝隊副隊長を務めてくれた淳子。急遽会議が入ったり、その会議が思うように進まなかったり…。戸惑いだらけだったと思う。でも淳子は思った以上にしっかり務め上げてくれて私はすごく助かったよ。来年は淳子が納得のいく活動をして下さい。がんばれ！

そして、前年度宣伝隊隊長のミフネさん、疲れきっていた時にご馳走して下さった食べきれないほどのお鍋…。心とからだが温まりました。どうもありがとうございました。

私は収穫祭を通してたくさんの素晴らしい仲間に出会い、支えられた。そして自分が少し成長した。こんな体験が大学生活で経験できるなんて思ってもいなかった。これも私の周りにいる人達みんなのおかげです。みんなは私の誇りです。みんなと三年間一緒に活動できてよかった！

最後になりましたが、厚木宣伝隊を支えてくれ、お忙しい中幾度となく活動に同行して下さった栗原先生を始めとする諸先生方、多くの活動に参加し、お手伝いをして下さった収穫祭実行委員会、農友会各部の方々に心より御礼申し上げます。



大好き（〉□〈）厚木宣伝隊

仲間たち

御輿隊長
3年　佐伯勇一

僕は今年神輿隊長を務めた。神輿隊長とは宣伝活動の一環として学科の神輿を作り、10月の半ばに世田谷の経堂で行われる経堂パレードに参加する部門の責任者である。作製期間は夏の未だ暑さが残る時期から始まり、構内の銀杏の葉が黄色く変わる秋にかけてのおよそ1ヶ月におよんだ。11月5日の体育祭の後神輿は燃やされた。炎の中で燃えていった神輿をみながら…

9月、試行錯誤の間一緒になって考え悩み意見しあった仲間たち。特に屋根には本当にこだわった。いつでも妥協はできたけどしなかった。こだわり続ける仲間たち。それはとっても輝いていてかっこよかった。

10月に入りそれぞれの部門も活動を開始し、忙しくなってきていた。そんな中時間をみつけて手伝いに来てくれた仲間たち。ほんとありがとう。

秋も深くなり夜中1時・2時まで作業していると体が冷えてやる気が出無くなりそうになったときなどコンビニの温かおでんを差し入れてくれた仲間たち。うれしかった。

また明け方まで作業し、終わったあと汚い学科室に戻って来てカップラーメンをすすりながらガヤガヤと一緒の時をすごした仲間たち。1日で一番幸せな瞬間だった。

完成式の日、できた神輿を囲んで盛り上がった仲間たち。ライトアップの瞬間はいまでも忘れられない。その後の宴。仲間たちが一緒になって喜んでくれた。涙がでそうになった。

経堂パレードの前日世田谷の生協の前で朝日ができるまで作業に付き合ってくれた仲間たち。あの夜はとっても寒かった。終わったあと死にそうな顔していた仲間たち。心の中で頭を下げた。

経堂パレードの日。エイサ、オイサ。すごく楽しそうに神輿を担いでいた仲間たち。みんなの気持ちが一つになった瞬間だった。晴れ晴れしていた。

その後収穫祭までいろいろあったけど、僕の収穫祭はこの神輿の1ヶ月だった。

神輿は燃えてなくなった。でも、仲間たちと過ごしたあのわくわくしどきどきした期間・そしてその思い出はいつまでも僕の心に焼き付いて離れないと思う。



力戦奮闘

体育祭委員長
3年　酒井孝徳

昨年、我々畜産学科は、総合3位という結果を成し遂げました。

自分は、1年生の頃「大学生活で何か活動して行きたい。農大にしかない活動をしたい。」と何度か考えていた。自分が入学式の終了後、サークルなどの勧誘などでいろいろと見学をし、先輩方にすすめられたのが統一本部である。しかし、自分が統一本部に興味を持ったとしても、入部しづらくそのまま半年がすぎて、夏休みに、体育祭募集の紙を見て、思いきって友人と2人で畜産学科統一本部に直接先輩にお願いをして入部することになった。

最初は、普通に楽しくやっていけるかと思ったら、現実は甘くなかった。畜産学科統一本部は、体育祭の中で特に応援合戦に力を入れていた。自分が踊りを練習するにしろ、なかなか思うどおりにいかず、先輩方にも、迷惑をかけてしまう事があった。それを何とかのりこえて、体育祭で沢山いい経験をした。自分は、2年生も体育祭を続けた。1年生の頃と比べ応援合戦の踊りも早く覚えやすくなり、先輩にもほめられてうれしい事も沢山あった。しかし、自分が後輩に指導するのも思うどおりできなく、気がつけば、体育祭を主にした2年生は自分1人、体育祭委員長としていくのは自分となった。先輩方からの期待、正直、うれしくて泣きそうになった。しかし、自分が体育祭委員長としてやっていけるのか不安でいっぱいだった。焦った。あっという間に第111回収穫祭がせまってきた。応援合戦の練習前に案を考えていくのにも時間が予定よりかかってしまい、また、1年生がどの位集まるのかも心配だった。それが、おどろくほど1年生が多く参加してくれ、また一生懸命、練習に参加してくれた。その後輩の姿をみて、自分は、大変助かった。また総合の競技でも厚木から世田谷に何人参加してくれるのが不安だったが、約111名の人たちが参加して下さった。そして体育祭本番がやって来た。競技は1位、女子のみの棒引きも圧勝、つな引きも3位をとることができた。そして1番力を入れた応援合戦。練習よりはるかにすばらしい舞ができた。OBの方々にも、過去の畜産の踊りの中でもすごかったとも言われた。みんなも上位にいけると思った。しかし、結果6位で残念であった。自分の事より辛い思いで練習してきた後輩がかわいそうであり、申しわけないと思った。しかし、後輩みんなが体育祭楽しかったと言ってくれて本当にうれしかった。そして3年間の体育祭の中で1番、良い思い出ができた。それもみんなが協力してくれたおかげである。こんな、感動した思い出を与えてくれたみんなに感謝しています。

みなさんありがとう。





やぐら

櫓装飾委員長
2年　飯塚　さやか

一年の時は主に家畜苑の手伝いをしていた私が当時の櫓委員長に「来年、櫓をやらない？」と言われたのは、収穫祭が終わりかけた頃だった。それまでほんの数回しか櫓の作業を手伝った事がなかったので正直戸惑ったのだが、櫓というものには興味があったので、それからしばらく経ってから引き受ける決心をした。

始め、前年の櫓の作業をあまり見ていない私は、どうやっていいのか何もと言ってもいい程わからなかった。それどころか、自分の中で決めていた図案決定の時期が来てもアイディアがまとまらず、一人気持ちばかりが焦っていた。しかも櫓には順位がつけられ、体育祭の総合順位にも関わるという責任重大な役職にまだ二年だというのに付いてしまったという大きなプレッシャーが重く圧し掛かっていたのだ。他の仲間達も心配して声を掛けてくれたのだが、何の作業も始めていない私はそんな人たちと向き合うことすらできなくなっていた。今振り返るともっと早いうちに周りの人に相談しておけばよかったと思う。

そんな葛藤があって少し出遅れたのだが、何とか図案が決定した。テーマは『闘牛』。闘牛と言われてスペインのあの闘牛をイメージする人は多いだろうが、私の描いたものは日本の肉牛を闘わせるという、日本の闘牛である。毎年畜産学科は動物の絵を描いてきていたし、ぼんやりと「畜産学科らしいものを描きたい」という思いがあったのでテーマにするにはもってこいだった。

さて、やっと図案が決まり、描き始めてからはもうあっという間だった。思っていた通りいっぱいいっぱいになったが、周りの仲間が快く手伝ってくれたおかげで櫓は完成した。そして体育祭当日、櫓にも順位がつけられた。その結果はここに記したくない程納得のいかないものだった。それを知った私は愕然となり、採点の基準は何なんだろうかと思った。自分の仕上げた物に絶対的な自信は無かったが、それにしてもこれはないんじゃ、と思った。

しかし、手伝ってくれた皆には本当に、本当に感謝している。夜中まで嫌な顔一つしないで手伝ってくれた皆、本当にありがとう。他の部門で大変なのに暇を見つけて手伝ってくれたり、櫓の土台を世田谷に行って作り上げてくれたり、時には徹夜まで付き合わせてしまった皆。体育祭直前に、櫓の横に旗を立てたいと我儘を言ってミシンを持ち出した私に巻き込まれてくれた皆。本当にありがとう、そしてごめんなさい…。

来年はもっと前々から準備をし、努力が結果に結びつくようなものを皆で作り上げたい。今年は大変だったけど、これに懲りずに来年も頑張りましょう！



出会い

研究棟アート委員長
3年　宮崎美帆

「わーい、できたー!!」

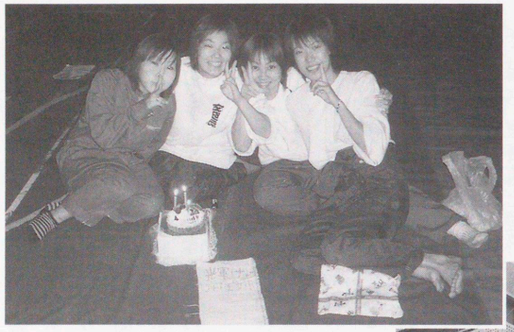
研究棟アート設置前日の夜、私たちの作品は完成しました。この3年間、つらく苦しい事もありましたが、いざ終わってしまうとなぜか寂しく、ずっとこのままでいたいという気持ちでいっぱいになりました。1年生の時は、まさか自分がこんなに収穫祭に夢中になるなんて思ってもみませんでした。軽い気持ちで参加したのに、いつのまにか畜友会の会室がどこよりも居心地のいい場所になっていました。

今年の研究棟アートの大きさは、去年同様縦14M×横29Mでした。この大きさの布に、ペンキで絵を書いて研究棟の屋上から吊すのです。今年は、雨にも風にも負けない物を作ろうと、ペンキを使ったのですが、布が大きい為、外での作業が多く、天候との戦いでもありました。強い風で布が飛ばされたり、突然の雨で、まだペンキが乾いていない布を急いで片づけたりと、思うように作業が進まない時が多く、寒い中徹夜になったり、装飾ギャルズにはだいぶ無理をさせてしまいました。それでも最後まで私についてきてくれて、感謝しています。ありがとう!本当はいつも不安で、でもそんな時先輩（今年も頼ってしまってごめんなさい。すごく助けられました。）後輩、同学年の仲間、たくさんの人々に支えられたお陰で、最後まで完成させることができたのだと思います。

また、設置の際には、大変多くの方々に助けていただきました。特に顧問の荻原先生、林さんを始めとする職員のみなさま、そして設置を手伝ってくれた仲間たち、研究棟アートを本当の意味で完成させる事ができたのは、みなさまのお陰だと、心から感謝しています。至らない面も多々あり、ご迷惑をお掛けしてしまいましたが、最後まで助けていただき、心配していた雨と風にも何とか耐え、収穫祭を無事終えることができました。

3年間、いろいろな事がありましたが、畜友会に入り、すばらしい仲間たちに出会え、本当に幸せで充実した大学生活になりました。みんな本当にありがとう!!

最後になりましたが、来年以降も研究棟アート、装飾ギャルズをよろしくお願いします。





一〇〇%家畜苑

家畜苑委員長
3年　横川暁士

家畜苑とは東京農業大学の学園祭「収穫祭」において畜産学科のメインといっても過言ではないと思います。それは、それはふだん一般の人ではあまり目にすることのない、自分達の研究室の動物を紹介したり、牛や豚などの家畜に慣れ親しんでもらう事で畜産学科を1番わかりやすく理解してもらうことができると思うからです。

ところで、題名に「一〇〇%家畜苑」と書きましたが、これはどういう意味かということを少々書きたいと思います。本来、畜産学科統一本部に入った1年生、特に男子は収穫祭準備期間になると収穫祭の次に行われる体育祭応援合戦にむけ全員参加し、その空き時間に家畜苑やその他の部門を手伝うというかたちでしか体育祭以外の部門には関わりません。しかし自分は1年生の時から家畜苑だけをやらせてもらいました。それからというもの家畜苑をより良くしようとする先輩方を手伝い、自分もその熱意に答えようと一生懸命でした。時には徹夜をし朝日を見ることもたびたびありました。また寒さでこごえながら作業をしたこともありました。また疲労と寝不足でかなづちでまちがって指を叩き痛い思いをしたこと

もありました。こんなことを書いているとつらい思いしかしてないように思われるかもしれませんが、楽しい思い出は書ききれないぐらいありました。そんな時は過ぎるのも早いものであっという間に2年たち、気がつけば自分は3年生になり純粋な家畜苑委員になっていたわけです。そういう混じりけ無しの純粋家畜苑委員という意味で一〇〇%家畜苑なのです。

そして今年の収穫祭の家畜苑では優秀な後輩にも恵まれ、思いのほか作業が順調に進み、自分ではとても満足のいく家畜苑ができたと思っています。そして、大盛況のうちに無事、今年の収穫祭を終えることができました。これは一重にご協力をいただいた各先生方、各研究室の方々、富士農場の方々のお陰です。ありがとうございました。また来年以降も家畜苑をよろしくお願いします。

そして、家畜苑を理解し協力してくれた畜友会のみんなSpecial thanks 本当に感謝しています。今年の収穫祭が3年間で1番楽しかったです。来年はもっと楽しく、良い収穫祭にして下さい。期待してます。





編集後記

「ふじみの」も今年で第三十九号を発行することが出来ました。

農学部が完全に厚木に移転して、早くも三年が経とうとしています。厚木の地にも農大の名が確実に浸透しつつある中、厚木キャンパス独自の雰囲気も作られてきたようです。この「ふじみの」第三十九号が今後の更なる厚木キャンパスの発展を担うものになれば幸いです。

最後になりましたが、この一冊を作るにあたり、ご多忙中にもかかわらず原稿を書いて下さった先生方、並びに会員の方々に厚く御礼申し上げます。

編集委員長　富田裕子

平成15年3月20日　発行

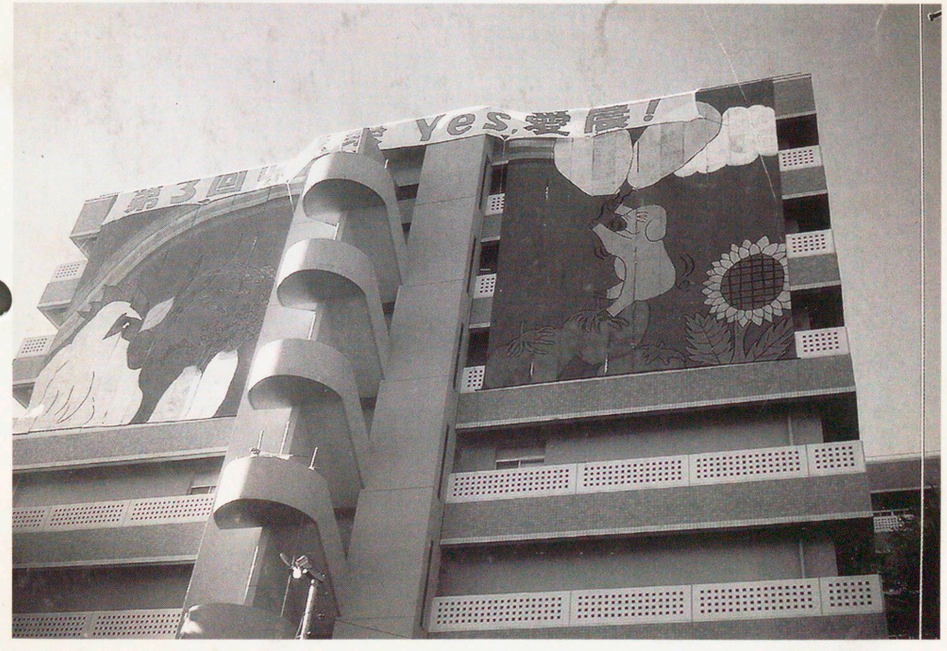
“ふじみの”第39号

編集委員　富田裕子
　　石井淳子
発行者　畜友会

神奈川県厚木市船子1737
発行者　東京農業大学畜友会
電話　046（270）6228

東京都新宿区改代町16
印刷所　株式会社　マイクロ印刷
電話　03（5261）1001


畜
魂


yes,愛媛!